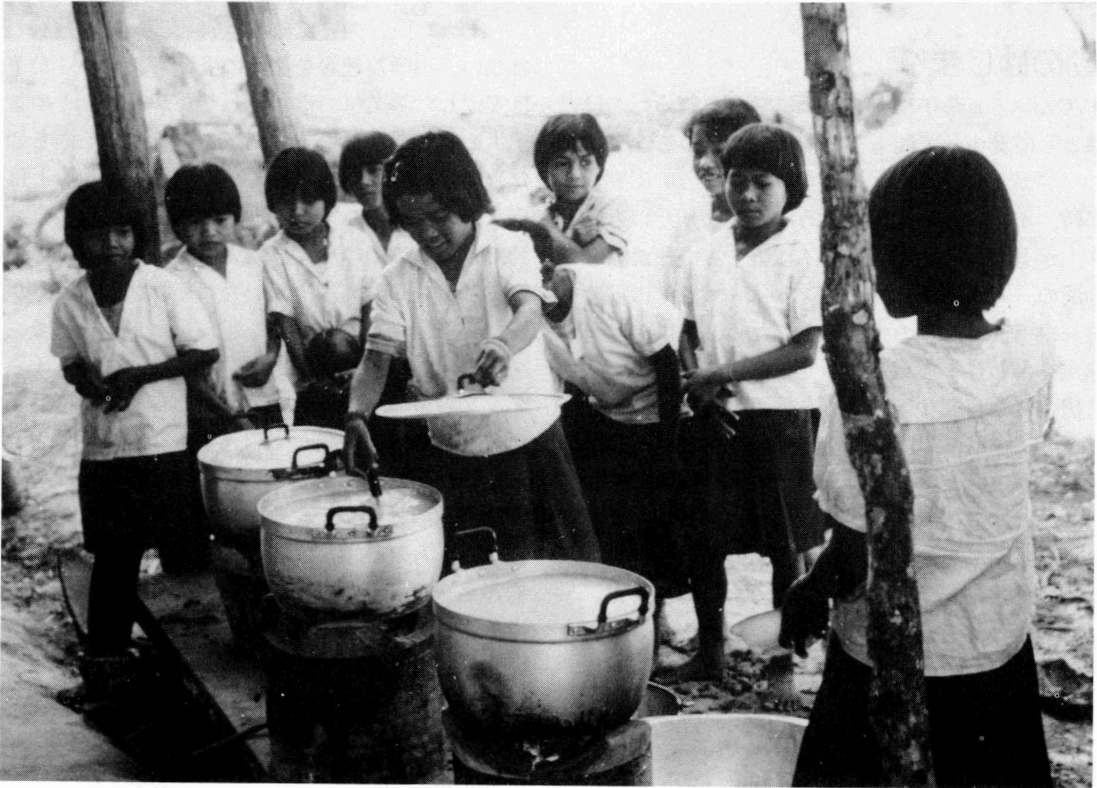


Trial & Error

トリアル・アンド・エラー

No.89

試 行 錯 誤



給食は自分たちで作ります (タイ)

特集 奨学金活動とは？

JVCの奨学金活動とは	2
奨学金活動の意味するもの	6
タイにおける奨学金援助とNGO	8
奨学金担当スタッフたちの ここだけの話	10
いんたびゅう > JOFIC/世界の子どもと手をつなぐ会 坂田喜子さん ...	12
奨学金援助とNGO CCWA国際精神里親運動部	14
(案) JVCの基本方針 JVCの今後の方向性について	15
シリーズ NGO活動を見直す	24
アジア民話の旅 ビルマ	26

JVCの奨学金活動とは――

スラムの人々の自立を支援

タイ地域開発担当 岩崎美佐子



活動のはじまり

JVCがスラムの子供たちへの奨学金を始めたのは、組織として誕生して間もない頃、1980年のことである。

当時、インドシナ難民のために力になりたいと、日本人があとからあとからタイに集まってきた。その仲間の一人が、偶然、クロントイ・スラムに行く機会を得て、スラムの生活向上のため、子供の教育に焦点を合わせて孤軍奮闘していたプラティープさんに出会った。彼女への共感を強めるなかで、彼がプラティープ財団（Duang Prateep Foundation、以下DPF）の教育プログラムのひとつである奨学金に自分のポケットマネーをはたいたのが、奨学金活動のそもそもの発端である。だから最初の里親は10人弱、全部がJVCの仲間かその知り合いであった。

やがて、クロントイに住み着いたり、出入りしはじめた仲間たちはみんなスラムに魅せられていた。その日暮らしなのにわずかなものをわけあう優しさ、他人の子供でもわけへだてなく育てる厚い人情、そして底抜けの明るさ。

そんな彼らとより親しくなるにつれて、彼らのおかれている状況が少しずつ見えてくる。スラム住民は都市人口の5分の1にものぼり、バンコクは彼らの肉体労働（建設労働、港湾荷揚、バス運転、廃品回収、内職など）によってはじめて都市として機能していた。それにもかかわらず、電気、水道、医療などの都市サービスは彼らのところにはほとんど届かない。長期雇用はまれ、たいていは不安定な日雇いで、仕事の数より人の数の方が多く、一カ月まるまる仕事にありつくのはとても難しい。賃金は最低におさえられているので、その日暮らしが精一杯。蓄えがまったくなく、父親や母親のけがや病気は簡単に家庭崩壊につながるなどなど……。バンコクは彼らを死なない程度に生かしておくことによって、はじめて国際都市として繁栄できていると言っても過言ではなかった。

「親の収入が少ないため子供に教育を受けさせら

れない、小学校教育を満足に受けられなかった子供は安定した職業につけない、したがって、そのまた子供の教育費がない……」そんな悪循環を断ち切るためには、奨学金活動は確かに有効である。とはいっても、経験もなく外国人である私たちが直接活動できるわけではなく、数年は支援者を募り、集めた奨学金をDPFに届ける、ただそれだけの活動が続いた。

1982年、JVCに奨学金担当としては初のタイ人スタッフが参加した。奨学金を援助するためには子供の家庭や学校を訪問して調査することが不可欠である。したがって、タイ人スタッフの起用はJVC独自で奨学金活動を開始する、いわば第一歩であった。とはいっても、そのままだよちよち歩き、1982年の夏には約70名の子供の奨学金を援助しているが、その過半数は、相変わらずDPFを通じての援助であった（DPFを通じての援助は徐々に減らし、1988年度の16人をもって終了した）。

より貧しい子供たちが選ばれる

何人かの奨学金担当スタッフをへて、1986年5月に現在のリラ・クンナロンが参加した。DPFも人材不足か、奨学金事務に手違いが多過ぎ、JVCは奨学金から一切手を引くか、あるいは本腰を入れてやるかの正念場に立たされていた。そして、話し合いの結果、奨学金は続け、その内容を一層充実させることにした。

どこのスラムに行っても、メオ姉さん（リラを子供たちはこう呼ぶ）の行くところ、あつというまに子供がたくさん集まってくる。彼らは口々に学校であったことや、彼らの一大事件を報告し、女の子たちはそっと、しかし競争でリラの手のなかに自分の手をすべりこませる。リラは、このころからスラムに増えてきた奨学金関係の他団体のスタッフと比べれば、ずば抜けて優秀であり、ひとりでたくさんの子供たちを担当できた。

奨学金活動では、対象となる子供の適正な選出が

活動の成否の鍵となるが、JVCの場合、対象となる子供たちは学校の先生、およびそのスラムの住民自治会に選んでもらっている。そして、最終的には奨学金担当が各家庭を訪問して、必要かどうかを判断する。スラムでは、どの家も似たり寄ったりのその日暮しで、生活に余裕があるわけではない。しかし、自治会の委員が選り、提案してくるのは、いつも少人数であり、しかも親が病気で働けないとか、刑務所に入っているなど深刻な理由があり、本当に奨学金を必要としている子供たちばかりである。自分たちの生活を律し、より貧しい者を思いやり、いつも公正である彼らの生活態度には、ただただ頭がさがるばかりである。

現在、JVCでは20余のスラムやその他（道ばたの住居など）に住む子供たち、200人に奨学金を支給している。奨学金を受けている子供たちの、顕著な特徴は、その60%の両親が離婚していることである。農村部ではほとんどみられない離婚がスラムに多いのは、就業の不安定さによる。夫婦のどちらかが、あるいは両方が別の場所に住み込みで仕事を得たりすることで夫婦の関係が疎遠になり、ちょっとしたいさかいであっけなく別れることになる。別れるとき、あるいはそれ以前から、子供たちはひとりであるいは兄弟いっしょに祖父母に預けられる。そして、ほとんどの両親は、それ以後送金はおろか、居所さえ知らせてこないことが多い。

それでも、祖父や祖母のいる子供たちはまだ幸せである。祖父母が亡くなり、叔父や叔母と住んでいる子供たちもかなりいる。子だくさんで貧乏にあえぐ叔父や叔母の家に預けられた子供たちは、ご飯を食べるのも遠慮しているのか栄養失調が多い。彼らは学校から帰るとカバンを置くのもそこそこに、家計を助けようとプラスチックや鉄屑を拾いに町に出て行く。あるいはヒシの実をとり沼に入っていく。たいいてい小学校を卒業したら働きたいという希望をもっており、それも待てないで4年生を終えたらすぐ働き始める子供もいる。

なかには、祖父母が亡くなって身寄りがなくなり、お寺で引き取られている子供もいる。

特別活動——キャンプ

JVCの奨学金活動では、子供たちに奨学金を支給するだけでなく、彼らの相互交流をも目指している。同じスラム内に住む友だち、学校の友だちを越えた交流は子供たちの世界を広げる。

年1回、奨学金を受けている子供たちのうち4年生以上の子供を対象に、カオヤイなど自然が豊かに残っている国立公園で、2泊3日のキャンプを実施している。毎年、参加する子供たちの数は約100人にもなり、その世話にはかなりの神経を使う。夜があまり暗くて静かなので怖れ、最初の夜はホームシックになってしまう子供、気持ちが昂って熱を出す子供などが必ずいるからだ。世話役としては、JVCの他の活動分野のスタッフ、かつて奨学金を受けていた奨学金OB、大学生ボランティア、他団体のスタッフなど多数に応援を頼む。生まれてはじめて山を見た子供の感嘆の声を聞いたとき、世話役たちは疲れもふっとんで大きな幸せを感じる。

毎週土曜日には、ナンシー・スラムで子供会を開いている。ナンシーの子供だけではなく、線路づたいに歩いて来られる近隣のスラムの子供たちも参加して、ときどき『雲』という新聞を発行し、奨学金を受けている子供たちに配っている。

奨学金が子供たちの手に届くまで

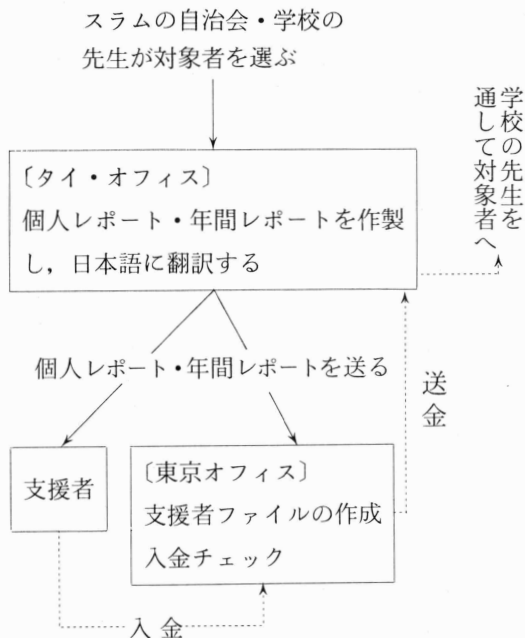
支援者からの奨学金が子供たちの手に届くまで、JVCではどのようなことをやっているのか、その1年を追ってみよう。

リラの忙しさは学年の変わり目（4、5月）から6月にかけて頂点に達する。まず、卒業した子供も途中で退学せざるをえなかった子供も含めて、すべての子供の「年間レポート」を作成する。そのためには学校へ行って勉強の様子を聞き、学校訪問をして家族の状況も調べる。父親の病気が快癒して働き始めたり、母親の仕事が見つかって経済が上向いてきた子供の奨学金は中止する。

新学期には、卒業などで奨学金を受けている子供の数は確実に減るが、進学を決めていた子供が突然就職したり、田舎に引っ越ししたりと、学校が始まるまでは正確な進学数がかめない。進学する子供の数が正確に把握できたら、欠員を補充する。新1年生など、あらかじめ数人はまえまえから決めておけるが、最終的決定は新学期にずれこむ。決定したら新しい子供たちの「個人レポート」を作成する。それには、名前、学年、家族構成など基礎的記述に加えて、なぜ奨学金を必要としているかという家族の経済状況も記入する。レポートは英文とタイ文の両方で作成する。

リラから英文の「年間レポート」と「個人レポート」を受け取ったタイに滞在する今泉恵は、翻訳ボ

JVCの奨学金のシステム



ランティアをさがし、日本語レポートを作成する。そして、子供が進学した支援者には「年間レポート」だけ、子供が変わった支援者には、どの子供を組み合わせるか判断し決定したのち、両方のレポートを送る。東京事務所にも「個人レポート」を送り、子供と支援者の組み合わせを知らせる。

リラは、ひとりひとりの奨学金を1年分まとめて学校の先生に預けるため、再び学校をまわる。小学校では授業料はいらない。しかし、教科書、教材、文房具、制服などはすべて自分で用意しなければならないので、奨学金はこれらの費用にあてられる。中学校と高校は連続した6年間の一貫教育である。学費がかかるうえ、教科書代も教材費も小学校とは比べものにならないほどかかる。

東京では岩崎美佐子が担当し、新規に支援希望者があり、欠員がある場合は新「支援者ファイル」を作成し、氏名、住所、入金日などを記入して、タイに送る。子供と支援者の組み合わせが決定したという通知があったら、子供の名前、学年、番号などを、このファイルに書き込んでいく。

クリスマスから新年にかけて、リラはスラムごとに、あるいは学校ごとに子供たちを集め、新年のカードを作成する。何週間かかかってすべて完成したら、それぞれの支援者に送付する。また、支援者からもカードが届くので、子供たちに届けに行く。支

援者からのカードを届けがてら、子供のカードを集められたら一回ですむけれど、なかなかそうはいかないで二度足、三度足になる。

年が明けると、岩崎は次年度の奨学金払込のお願いの手紙を支援者に送付し、東京事務所に入金してもらう。ほとんどの支援者はすぐ入金してくれるが、遅れる人は毎年のように遅れ、2度、3度催促しなくてはならないこともある。何かのきっかけで奨学金のことを知り、支援者になってみたものの、次の年は熱がさめたのか、なしのつぶてで続かない人もいる。これは困る。相手のあることだから、少なくとも子供が小学校6年を卒業するまでは続けて欲しい。東京事務所に入金された奨学金は4月にタイに送る。

学年末が近づくと、リラは学校をまわって出費状況などを調べる。

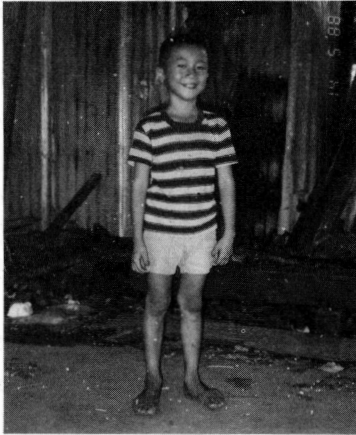
奨学金ラッシュとJVCの方針

現在、リラはひとりで200人を担当しているが、これは驚異的な数である。担当スタッフを増やしたいという要請も一度ならずあったが、資金面でも、他の地域開発活動との比重のかけ方から、2人にはできなかった。奨学金活動をしている他の団体では、ひとりのスタッフは30人から最高で80人の子供を担当していける。ひとりのスタッフの担当する子供の数が少なければ、子供たちともっと緊密に接することができるというのがリラの言い分だ。それならいっそ子供の数を減らそうかと考えたこともあった。しかし、それにはリラが反対した。どの子供もかわいしいし、気持としてはもっともっと増やしたいくらいだからと彼女は言う。

奨学金活動をしようとアメリカのお金持ちの団体がバンコクに上陸した1985年頃から、バンコクのスラムは奨学金ラッシュになってきた。子供を取り合って縄張りを定めたという話や、あるスラムでは子供全員に奨学金をばらまいたという話を耳にするにつけ、私たちは、なんのために奨学金活動をするのかということを、あらためて話し合う機会を何度か持った。そこで確認したことは、JVCは奨学金活動をスラムの人たちの自立のための活動の一環として位置づけているということである。

スラムの子供に奨学金という活動方法が有効でなくなるとき、私たちは対象をほかの場所に移すか、あるいはほかの活動方法をとるであろう。

ボクたちを応援してね



ナリット・コムウォンサ(男) 9歳
居住地域ークロントイ1-3区

学年 チュムチョン・ムバーン・パ
ッタナー小学校3年

家族構成・最終学歴

継父 (37) 小学4年卒
母 (32) 小学2年修了
兄 (14) 小学6年卒
兄 (12) 小学5年在学中
妹 (7) 小学1年在学中
弟 (1)

家屋の状況

借家で、水道代、電気代含めて月に350バーツ払っている。広さは5m×7mで、トタン屋根の木造。家

具は寝具、調理器具と古いテレビのみ。

家族の状況

ナリットの家族は地方に住んでいたが、彼の実父が亡くなったため、1984年にバンコクに移り、母は再婚した。継父のマノップ氏はクロントイ港で日雇い労働者として働いており、日給は100~200バーツであるが、いつも仕事があるとは限らない。一番上の兄は小学校卒業後、食堂でウェ이터をしている。月収700バーツ。母は、マノップ氏との間に生まれた子供の世話をしているため、仕事につくことが出来ない。



チュンティマ・ダンメサップ(女) 10歳
住所なし(学校付近の小さいスラム)

学年 ワット・ガラヤー小学校4年

家族構成・最終学歴

母 (28) 小学3年修了
弟 (4)

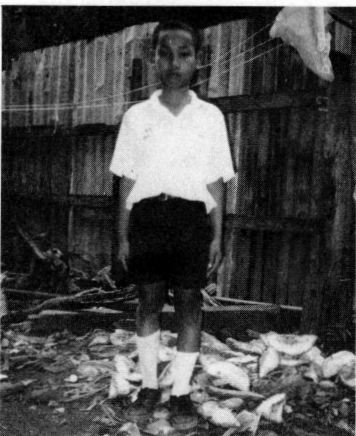
家屋の状況

チュンティマの家族は約1年前に他のスラムで立退きにあい、今の家に移ってきたが、ここでもいつ立退きにあうかわからない。家は4m×5mで、ベニヤとトタン屋根で出来ている。調理器具と古い寝具のみがある。電気も水道もないので、水は

近所の人から1日5バーツで買い、近くから電線をつないでもらって、電灯線代として月80バーツ払っている。

家族の状況

両親には3人の子供があるが、1年以上前から別居している。チュンティマと弟は母と住み、3歳の妹は父の方に行っている。別居して以来、父は一度も訪ねてこない。母は市場で菓子を売って1日50バーツの収入があるが、一人で子供たちを養育しなければならない。



アネーク・ガンダーン(男) 13歳

居住地域ータンボン・バックロー

学年 ジャンロン・ウィッタヤ中学校1年

家族構成・最終学歴

父 (36) 中学3年卒
弟 (10) 小学4年在学中

家屋の状況

住居は古い木造家屋の5部屋のうちの一つで、4m×5m。月500バーツの部屋賃を払っている。家財道具は寝具と台所用品。

家族の状況

アネークが5歳の時、両親が離婚。それ以後母は一度も戻ってこない。父は政府機関の事務所で印刷工として働いており、月給は3000バーツ。父は子供の面倒をみないばかりか、時折暴力をふるうこともある。父の収入だけでは中学に通うには不十分なので、アネークは休日には宝くじを売ってわずかながら収入を得ている。

奨学金活動の意味するもの

奨学金担当

リーラ・クナロン

都市化と子供への虐待

JVCの奨学金を受けている子供たちのなかには深刻な問題を抱えている子供たちが多い。先月は子供が親に虐待され、家から逃げだすという事件があり、なんとか捜し出して子供救援センターに保護してもらった。都市化とともに離婚、子供の虐待、捨て子など、おとなの心がすさみ温かい生活を営むことのできない家庭が増えつつある。都市化はなぜ心の荒廃をもたらすのであろうか。

タイ国の近年の経済発展はめざましい。いたるところに出現している近代的なショッピング街には、輸入商品があふれている。高層ビルの建設が相次ぎ、昼休みともなれば冷房のきいたオフィスから、ドレスアップした人たちが食事やおやつを求めて街路にどっと繰り出す。そんな超近代的な様相を呈している街角にも、屋台を引いて、あるいは路上に坐りこんでソバやお菓子を売っている人たちがいるが、彼らはたいていスラムの住民だ。

毎日いやでもかいま見る別世界。港の荷役としてさまざまな物を運んでも、建設労働者として巨大マンションや高層ビルの建設にたずさわっても、それが決して彼らの手に届くわけではないのだから、心が荒れてもしかたがないかもしれない。

JVCに参加するまで、わたしは週刊新聞『スアナ・コード』のレポーターとして働いていたが、もっと自然でいられる仕事をしたいと思い、3年前にJVCの奨学金担当スタッフの募集に応募して今日に至っている。ビジネス抜きで子供たちに直接かわれることは文句なく楽しい。しかし、奨学金活動を通して、わたしたちJVCは、いったい何をしようとしているのかを自問し続けてきた。

奨学金活動の目的は、子供たちに就学の機会を与え、彼らが自己開発していく可能性を開くことである。

スラムの住民は、他の都市住民と比べると、他人への思いやり、伝統的なモラルの尊重などの気風が強く残っており、互いに助け合って生きていく知恵を身につけている。これまで家庭やスラム内の問題を、そのような伝統的には農村で育まれた知恵によって解決してきた。しかし、バンコクの近代化は、機械化が進むにつれて、彼らの肉体力を必要と

しなくなり、反対に高速道路などの土地の高度利用のために、無用なものとして追い出しをはかるようになってきている。この巨大な力には、彼らとてその知恵を生かすことが出来ない。

このようにして、離散する家族は増え、子供たちはますます路頭に迷う。親に捨てられた子供の孤独を思いやるとき、わたしは胸がつまる。年老いて、仕事もできなくなっている祖父母とさびしく暮らす子供たち、貧しい他人の家庭のなかで気兼ねをしながら暮らす子供たち、わがまを言える子供はどこにもいない。

「この子供たちには、たくさんの仲間を作ってあげることだ」という思いで奨学金を受けている子供を対象に、子供会を組織した。子供たちは、子供会でそれぞれの能力を発揮する。皆をまとめるのがじょうずな子供、年下の子供たちに優しく指導できる子供、絵や字のじょうずな子供。子供たちは、持っている能力を磨き自信をつけて帰っていく。

広い地域に分散する子供たち

活動も4年目に入り、奨学金を支給していくことに関する技術的な悩みはほとんどなくなった。児童数が200人と多いため、家庭訪問を行いレポートを仕上げるのに毎年4カ月もかかってしまうが、これもさしたる問題ではない。悩みがあるとしたら、子供の数が多く、地域が分散しているため、すべての子供たちの生活全般に十分な対策を立てられないことである。

しかし、他のある団体が行っているように、ある特定のスラムの子供たち全部に奨学金を配るのには断固反対である。これは簡単ではあるけれど、支給する側の論理に沿った方法である。わたしたちはスラムの人たちにお金をばらまき、彼らに依存心を植えつけようとしているのではなく、あくまでもスラムの人たちの自立を手伝っていることを忘れてはならない。だから、例えば一家の働き手の病気が直り、経済的になんとかやっていると知った子供の奨学金は、その子供に「よかったね」と言って迷わず打ち切ることになっている。

奨学金は、それを本当に必要としている子供たちのみに与え、決してむやみやたらにその対象児童を



◀やった、やった、バスケットは私たちの勝ちよ
(子供会で)

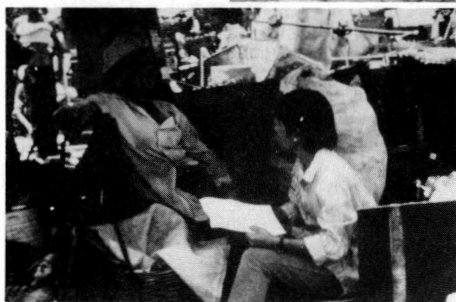


▲ゴミの中にならって売れるものはたくさんあるんだ

◀祖父母に預けられっぱなしの子供も多い



▲子供たちはそれぞれの才能を発揮する



◀家庭訪問をするリラ

増やすべきではない。しかしいったんこの子と決めたからには、その子供の学校の問題だけではなく、家庭の問題をふくめた生活全般の問題にかかわっていくのが望ましい。したがって、子供の数はどうしても制限せざるをえない。しかし、現実には奨学金を必要としている子供たちは、広範囲に分散して存在しており、その範囲は狭まるどころか、年々広がってさえいる。さらに、昨年の南部の水害で両親を失って途方にくれている子供たちが大勢いると聞けば放ってはおけず、ついに今月から700キロも離れた地方の子供たちにも手を広げることにした。

深刻化する子供の問題

JVCの奨学金活動は、それ自体独立したものではなく、あくまでもコミュニティー生活全体の改善を

意図している地域開発プロジェクトの一環として取り組んでいる。したがって、JVCの奨学金活動は、この活動をより広い視野でとらえられるという長所を持っているが、それは同時に子供の問題を深く掘り下げていくことができない欠点にもなっている。

タイにおける子供の問題は、ますます深刻化している。児童売春、幼児売買、児童強制労働、児童虐待、捨て子などなど、どれをとってみても簡単に解決しそうにない。しかし、これらの問題をたどっていけばこの人たちが物質的に貧しいという問題に到達するし、それに起因する心のすさみといった問題にも突き当たる。したがって、子供の問題を効果的に解決するためにも、JVCの地域開発プロジェクトはより広範な視野と取り組みの中で進めていかなければならないといつも考えている。

タイにおける奨学金援助と N G O

タイ、とりわけバンコクのスラムでは、数多くの NGO が活動しているが、奨学金プロジェクトをもっている主な 5 団体にインタビューを行った。いずれも JVC 同様、里親制度をとっているが、フォスタープランの場合は里子の家族は医療、職業訓練、家屋の修理などそれぞれのケースに応じた援助を受けているので、すべての里子が奨学金をもらっているわけではない。ワールドヴィジョン(スバニミット)の場合は奨学金だけでなく、地域のニーズによって保健衛生、給食、宗教教育等も行っている。また、対象者のなかで中学生～大学生は、家族が希望すればそこまで面倒をみる、という意味で、全部を大学卒業まで援助するというわけではない。

主な奨学金援助団体

団 体	活動開始年	活 動 地 域	受 益 者 数	援 助 国	スタッフ数 ^{注)}	対 象 者
Friends for All Children Foundation (FFAC)	1980	バンコク市内 その他	約300人 保育園100人 小学生100人 中学生、専門 学校生100人	主に海外から (日本のスポ ンサー10人)	18人 他にボラン ティア20人以上	保育園児から 中学生まで
Foster Parents Plan International /Bangkok (FP)	1985	バンコク市、 及び近郊の35 校	里子4000人中 2000人	アメリカ、イ ギリス、オー ストラリア、 カナダ、日本、 オランダ、ベル ギー、西ド イツ	75人(うち翻 訳スタッフ3 人、他にボラ ンティア)	小学生のみ
World Vision Foundation of Thailand (WV) (スバニミット)	1979	バンコク市内 の60のスラム、 24県	タイ全体で約 3000人 小学生-80% 中学生-15% 保育園-5%	アメリカ、カ ナダ、西ドイ ツ、オースト ラリア、香港、 シンガポール、 イギリス、ニ ュージーランド	400人(奨学金 スタッフ-70 %, 事務スタ ッフ-30%)	保育園児から 大学生まで
Duang Prateep Foundation (DPF) (プラティープ財団)	1978	バンコク その他	4745人 (バンコク- 1200人、他方 -3545人)	タイ、日本、 欧米	奨学金スタッ フ12人 ボランティア 3人	保育園児から 大学生まで
Human Development Center (HDC)	1976	クロントイ・ スラムとその 近辺	571人 小学生-50%	欧米諸国	奨学金関係者 は5人	小・中学生、 専門学校生、 大学生
Japan International Volunteer Center (JVC)	1982	バンコクのス ラム(約15カ 所)	200人 小学生-177人 中学生他23人	日本	奨学金関係者 は2人 翻訳ボラン ティア数名	小学生 中学生

注) 人数だけが書いてあるのはスタッフの総数で、奨学金だけに関わっているスタッフ数ではない。援助国のスタッフは含まない。

NGOの活動Q&A

Q：対象となる児童をどのようにして探すのか？

A：政府機関で働いているソーシャル・ワーカーや、学校の先生が紹介する（FFAC）場合や自ら地域の調査を行って探す（WV）、コミュニティの委員会に紹介してもらう（FP, HDC）、奨学金を受けたいと思う家族が直接申し込む（DPF）などがある。JVCの場合は学校の先生もしくはコミュニティの自治会長に紹介してもらう。

Q：児童に奨学金を出すか出さないかを決める基準は何か？

A：どこにも共通なのは一家の総収入、家族数だが、家屋の状況（FP）、社会的地位（WV）、離婚などによる家庭崩壊があるかどうか（DPF, JVC）、両親の意向など要素はさまざま。ただし、具体的にどのレベルなら該当するか（例えば対象となる家族の収入の上限をいくりにするか）という判断の基準は各団体によって違ふとみてよいだろう。また、最初に援助対象とするときの年齢制限（13歳以下）を設けているところ（FP, WV）や、家族が引っ越し予定だったり、本人が犯罪に関わっている場合には対象外とする（FP）ところもある。

Q：里親にはどのような形で報告を行うのか？

A：システムはほとんどどこも同じで、支援者が里親になった時点で写真付きのレポート（児童の履歴書、家族状況など）を送り、年に1回、状況の変化、児童の近況などを知らせるレポートを送る。後者には、児童の成績も含まれる（JVC, DPF, WV, FFAC）。使われた奨学金の内訳も里親に知らせる（DPF, JVC）。児童から里親への手紙を義務づけて

いるところもある（FP, DPF, FFAC, WV）。HDCは、子供及び家族との接触、レポートの作成のみを行い、里親との連絡はCCFという他の財団に任せている。

Q：奨学金はどのような形で、誰に渡されるのか？

A：奨学金といっても、公立の小学校では学費は無料なので、「学校に通うための必要経費」をカバーするために使われる。現金で渡す場合（JVC, DPF, FFAC）と品物で渡す場合（FP）、両方（WV）がある。現金の場合、先生（FFAC, JVC）、両親・保護者（JVC）、本人（DPF）が受け取り、子供が領収書を提出したり、先生がそれぞれの子供から要請があるたびに手渡ししたりするので、使途は明らかになる。HDCでは、児童から領収書の提出があるごとに家族に払い戻す形をとっている。タイの学校では制服着用が義務づけられているので、衣類、鞆、靴などを現物で個人に支給し、（FP, WV）昼食代、（地方で中学に通う児童のための）交通費、中学校以上の学費などは現金で学校に渡す（WV）。

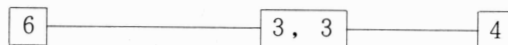
Q：児童（および家族）を援助対象から外すのはどんな場合か？

A：児童の側の問題と、団体側の問題とがあるが、前者では退学（住所移転、仕事につく）、卒業後就職、結婚、死亡などがある。後者では、家族の経済状態が好転し、援助の必要がないと判断された場合（JVC, FFAC）、他団体から援助を受けているとわかった場合（DPF）、非常に希であるが家族が活動に協力しない場合（FP）など。

（今泉 恵）

タイの学校教育

・教育制度 小学校（6～12歳） 中・高等学校（13～18歳） 大学
〔義務教育〕



・小学校就学率 1960 84%
1983～86 93%

・中学校進学率 1983～86 35%

・小学校第1学年に入学したものが小学校を終了する率
1980～86 64%

・成人の識学率 1970 79%
1985 91%

註 教育制度は日本と同じ6・3・3制であるが、ほとんどの中・高等学校はいっしょで、中1～中6という呼び方をする。



こ こ だ け の 話

T 今回の奨学金特集だけどさ、新しくプロジェクトとして始める時の問題点とか、他の団体のシステムなんかは何となくわかったけど、肝心の担当スタッフは何考えてんの？何かおもしろい話聞してる？

E そうだね、いろんな NGO のスタッフの話と、彼女自身の経験からこんな結論に達したらしいよ。「奨学金プロジェクトには、里親と、NGO スタッフと、受益者の三者があるけれど、それぞれの思惑の違いがいろんな問題や誤解を生んでいるんじゃないだろうか」って。

T どういうこと？

E 例えば、里親のなかには里子にのめりこんじゃう人がいるわけ。あの手この手で里子に自分の思いを伝えようとする。で、プレゼントとか送ってきたりして、それも子供には届けるけど、スラムの中って隣どうしくっついてるし丸見えじゃない。なんであの子だけもらえるんだろうって、羨ましがる子がいるかも知れない。生活環境って想像しにくいと思うけど、できるかぎり想像力を働かせてほしい。

それから、奨学生数は増えれば増えるほどいいと思っている人もいるみたい。でも、対象にできる人数って NGO の規模によって限度があるし、多ければ多いほど（スタッフの人数にもよるけど）子供や家族への対応が雑になる可能性が高いと思うよ。

それと、困るのは「この子に規定額よりたくさんお金をあげてくれ」っていう人。お金さえあれば豊かになれる、なんて本当に信じているのかなあ。いくらスラムの人たちが貧しいと云って皆働くことに一生懸命だし、援助はあくまで彼らが困っているときの一時的な支えであるべきだと思う。はいはいお金をあげても彼らを助けるどころか堕落させちゃうだけだってことを、そういう里親の人にはぜひわかってほしいな。それと、里子のことだけ考えるんじゃないで、なぜひ子供を小学校にやるのさえ苦労するような状況にあるのか、

ということにも思いを馳せてほしい。でも、NGO スタッフも、奨学金の支給は彼らの自立をサポートする一手段だってことを一般の人に知らせる努力を怠っちゃいけないと思う。

T なるほど。でも難しいよね。子供のレポートなんか読んでも、先進国の感覚でとらえちゃうとすごく貧しい感じするしね。実際には日本なんかよりよっぽど精神的にゆとりがあったりするんだけど。

E それから NGO の思惑ね、これは奨学金活動の目的といってもいいんだけど、団体によってかなり違うわけ。さっきはあげよう病の里親の話をしたけど、なかには本当にあげることで問題の解決になると思ってる団体もあるらしいよ。でも結局は、そういうところの活動は奨学生をスポイルしたり、住民の間に対立を生んだりするだけだって。

T もうちょっと具体的に話してくれない？

E 例えばね、奨学金を物であげるとき、一人当たりの金額、あるいは品物の数を一律にしないで、それぞれの必要に応じて支給しているところがあるんだ。だから、制服のズボンの傷みの激しい子供は、他の子供より多く支給してもらうことになる。もし破れたら新しいのをもらえる、とわかったら、物を大切にしないでわざと乱暴に扱って「新しいのをください」と言うかもしれない。誘惑の原因を自ら作っておきながら、彼らを不正直よばわりすることなんてできないと思う。それに家族だって、「何であの家の子供ばかりたくさんもらうのか」って不満に思ったりするだろうし。

T でもそれ以外の団体は、住民の自立を助けるという主旨で活動しているんでしょう？

E うん、奨学金が活動のすべてじゃないけど、なにか託児所のようなものを作るときでも、住民の協力を求めたり、信用組合の作り方を指導したり、いろいろ工夫しているところも多い。けど、ここでもどうしても触れておきたいことがあるんだ。本当はタブーなんだけど……。

T 何？もしかして里親から払い込まれた寄付の使い道とか。

E そう。具体的にどうなっているのかは、それぞれの団体の内部機密だろうから謎なんだけど。それ



に里親からもらう金額にもよるし。でもさ、どこもだいたい個人スポンサーでしょ、例えば国連なんかはバックになってる難民関係のプロジェクトだったら、何に使ったかって報告しなきゃいけないだろうけど、そういうチェック機能がないからいっちゃえばやりたい放題できるわけ。もし、あげます病のNGOならじゃんじゃん住民にあげまくって、住民を援助中毒に追いやることもできる。住民の自立を助けるという旗印のもとに、あげるもの、使う費用を最小限に抑えてとりあえず看板に偽りはないものの残った資金はごっそり運営費、それも豪華ビルを建てたり、人件費に……。

T ええーっ!!?それじゃあまるでスラムの子供を安く仕入れて里親に高く売りつけてさ、ボロもうけしてるようなもんじゃない!!金の流れは逆だけど。里親のなにかしてあげたいという気持ちにつけこんでビジネスやるってのはあんまりだわ。

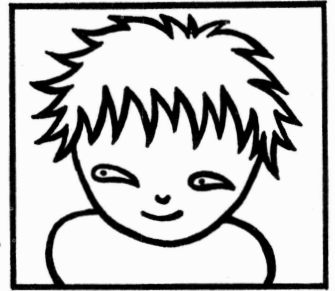
E もちろんこれは極端な例だよ、だけど特に規模の大きいところは運営費の割合もおおのずと大きくなるから、「活動のためにお金を集める」が「お金を集めるために活動する」にならないように、十分気をつけないといけないと思うんだ。それと、スタッフの人数が増えるほど、スタッフ間のギャップも大きくなるだろうね。住民と接しているスタッフが彼らのニーズを理解していても、プロジェクトの責任者にはなかなか状況がわかってもらえないということもあるんじゃないかな。

結局重要なことは、奨学金プロジェクトに関わる三要素、里親との通信、受益者との接触、アドミニストレーションに対してどうエネルギーと予算を配分するかってことだね。寄付がないとやっていけないから、つい里親のご機嫌とりに躍起になっちゃうんだけど、家庭訪問なんかもおそろそかにしちゃうんだけど、それに、多すぎるのも問題だけど、運営費もある程度は必要だし。スタッフの仕事の質とも関係してくるしね。

T それでは最後に受益者の思惑について。

E これは援助が供給過剰になってきて以来発生している問題なんだけど、新しく援助対象者を探す時家庭状況を調査するでしょ。そうすると援助を受けようと実際よりも貧しくみせかけようとするんだって。それとか、ある団体からもうもらっていてもまたもらってないような顔をして、別のところからも奨学金をもらっちゃうとかね。少しでも自分の利益を守ろうとする意思が働くだろうし、いろんな購買

欲にとらわれることもあるだろうね。特に商品でなくて現金で家族に渡したりする場合、NGOの側の意図を理解してもらうのは難しいみたい。もらう側にしたらさ、



まず、ただものをく

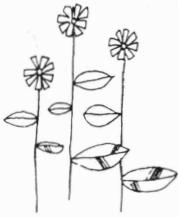
れるとはどういう訳だろう、って思うでしょう。でもそういう団体がわんさとやってきたら、「もらえるものなら徹底的にもらってやろう」という気にもなるだろうし。そうそう、難民キャンプなんかと違って、各団体の活動が重複しないように統括する機構もないから、勝手によその団体に向かって「活動がダブると住民に悪影響がでるからあんたやめなさいよ」と言うわけにもいかないしね。

T なるほどね。たかが奨学金といえども、里親にもスタッフにも、受益者にもそれぞれの考え方があるわけね。では最後に、奨学金プロジェクトはどんな方向に向かっていくべきなのかしら？

E いくつかのNGOでは今後も人数を増やしたがついているみたい。でも、JVCスタッフのリラの話だと、もうバンコクでは奨学金をもらってない子供を探すのが難しいくらいの状態なのね。バンコクだけでなく地方で活動を広げている団体もかなりあるし、地方ではバンコクより援助を必要としているところも多いだろうから、それはそれなりに意味があると思う。ただ、奨学金を出すこと自体は、問題の根本的解決にはならないからね。あくまで困窮時の応急措置であって、住民の自立を助ける活動と並行しておかない、いずれ援助が必要なくなる時期が来るように活動の方向を決めていかなきゃいけないと思う。それと、今まで例にあげてきたような問題は決して簡単に解決できるものではないけれど、まずはNGOのスタッフが里親にも受益者にも誠意をもって対応することが大事なんじゃないかな。事実をできるだけ正確に伝える努力、長い目でみて本当に受益者のためになる活動を選択する努力を惜しまなければ、里親にも受益者にも、NGOのめざすものをきっと理解してもらえと思う。JVCのスタッフにも、このへんはしっかり心に留めておいてもらわなきゃね。

T ほんのおしゃべりのつもりが結構充実した内容になったね。それじゃ次のCD特集で会いましょう。

代表 坂田 喜子 さん



主婦が始めたNGO

その長続きの秘けつは？

ひとりの主婦がふと見つけた新聞記事がきっかけでひとつのNGOができた。9年前のことだ。たった3人で始めた活動も今では会員が全国に500人。助成を依頼する手紙も世界中から舞いてくるようになった。現在資金援助を行っている国はフィリピン、タイ、バングラディシュ、インド、ネパール、ボリビアなど6カ国に及ぶ。これらの国で活動をしているNGOを通じて、貧しい子供たちへの給食、医療、教育支援などを行っている。JVCのタイの図書活動も5年ほど前から支援していただいている。

□駅で買った新聞にNOVIB(オランダのNGO)の食卓募金のことが載っていたんです。それは「食卓に貯金箱を置いて、第三世界から友だちをひとり招いたつもりで貯金する」という運動でした。それまでもいろいろな募金活動をしていましたが、「この貯金箱の発想はすばらしい！」って思ったんですね。さっそくNOVIBに連絡して貯金箱を1000個送ってくれるよう手紙を書きました。

坂田さんの行動力には実際驚かされる。教会で読んだ「マザー・テレサ」の本に感動し、たった1人でマザー・テレサを助ける会の募金活動を始めたり、『難民』という写真集を出版社にかけあい、2割引で売ったりと枚挙にいとまがない。

□そんな時に、あの新聞に出会ったんです。1人の力に限界を感じていましたし、ただ募金を送るだけでなく、子供たちが食卓に置いた貯金箱を見てアジアやアフリカの子供たちにも関心を広げることができると、開発教育にとっても関心を持ちました。

坂田さんは思いたったらすぐ行動に移してしまうという。この持続力、エネルギーはどこから来るのだろうか。

□実は7歳の時満州から引き揚げてきたんです。幸いに私たちの家族はバラバラにならずにすみました。が、もうほんとにいのちからがらという感じで。だから困っている人とか、難民という他人ごととは思えなくて、からだが自然に動いてしまいます。そして、あの当時の厳しさを思うと、ものにあふれた今の世の中に疑問を感じていましたし。今では、いろいろな人に会い、自分の知らないことを知る喜びに支えられていると思います。ほんとに楽しいんです。

JOFICのオフィスというか、仕事場は坂田さんのお宅のリビングルームである。毎週月曜日に5人のスタッフが集まり、ミーティングをしたり手紙の返事を書いたり忙しい。お子さんたちも今でこそお母さんのよき理解者だが、小さいころは「どうしてうちだけこんなに忙しいの」とよくいわれたという。

このような活動を続けようと思っても、家族の理解がなければ長続きしない。坂田さんにも御苦労があったと思うのだが……。

□夫は、結婚しても女性は勉強するか仕事を持つべきであるという考えの持ち主でしたが、この活動を始めた時は「感情に先走っている」と、あまり賛成しませんでした。でもある時期から考えが変わって、良き協力者となり今では会員の名前をコンピューターに入れてくれたり、「チボリの森の会」というNGOを作ったんですよ。3年前家族でフィリピン※に行った時に山に緑がないのに驚いて、仲間を集めて植林活動を始めました。会員は50名、会報づくりに熱心です。昨年のNGO小田原フォーラムでは、夫婦で別の分科会に出席しました。

夕食後のテーブルで、夫婦がそれぞれの活動のために書類やパソコンに向かっている姿を想像するの



▲一家でフィリピンを訪問。チボリの学校の先生たちと。

◀坂田喜子さん

は楽しい。「難民、難民なんていわないで」といっていた息子さんたちも大人になるにつれて親のやっていることに関心を持つようになった。

□子供にはJOFICのことについてあまりうるさくはいいませんでした。自然にわかるだろうと思って。次男が中学3年のころ、受験勉強中に親子で話しあったことがあったんですね。その時に「僕、お母さんのやっているJOFICの仕事はとても大変だと思うよ。僕もボランティアで手伝うよ」と言ってくれたんです。うれしかったですね。長男は高一の時、JVCのスタディーツアーでタイに行き、次男も続いてフィリピンのツアーに行きました。

また、坂田さんのお宅では3年前から毎年のようにホームステイとして外国人を受けいれている。中国、フィリピン、マレーシア、フランス、アメリカと、様々な国からやってくる。混み合ったところは家族中が寝るスペースを確保するため大変だったという。そんななかで大きな副産物があった。はじめは戸惑っていた御主人のお母さんが、みんなが親切なので彼らの来るのを心待ちにするようになったのだという。今では家中で大歓迎なのだ。

このように家族の理解と協力を得て坂田さんの活動も軌道に乗っているかに見える。が、ときどき自分たちの活動に自信をなくすこともあるという。

□資金援助だけでは消極的で、もっと直接交流を持ちたいと思うことがありますね。しかし、やはり主婦としての限界がありますから、スタッフがみんな

プロジェクトを見に行くわけにもいきません。そこで“できる時に、できる事を、できる人が”をモットーに継続させることをベースにしています。

今後はユネスコで出している第三世界の紙芝居をもって、小学校や幼稚園をまわるつもりです。NOVIBの貯金箱の意味していた開発教育を、今度こそやれると思っています。どこかにお知りあいの学校の先生はいらっしゃいませんか。

最後に支援されているJVCの活動について感想をお聞きしたら、「まず、実際にぜひ図書館を訪れてみたい。また他の支援プロジェクトのように、できればJOFIC用のレポートを年一回お送りいただきたい」と。ぜひ今度はJVCのタイの活動現場を訪問していただきたいものだ。

JOFICの住所

〒275 千葉県習志野市香澄1-1-8-206

TEL 0474 (51) 9337

NOVIBの
食卓に置く貯金箱
※ ミンダナオ島
チボリ



個人の支援から地域の支援へ

奨学金による支援は顔と顔が見える関係なので里親としては理解しやすいところがある。外国に自分を頼りとする子供がいるというのは充実感のあるものだ。しかしともすれば、“わが子”かわいさが先に立ってしまい、第三世界の置かれている状況にまで想像が及ばないことがある。1975年から里親運動に取り組んでいるCCWAでは、個人への支援を地域への支援に広げているが、どのように活動をとらえているのか、マニラ事務所長の小林毅さんにお話をうかがった。

CCWAでは、奨学金を含めて里子のニーズを満たし、地域の開発協力のための支援（里親会費）をして募金活動をすすめている。教育を受けられない環境というのは、個人の問題というより地域の貧しさに原因があることの方が多い。したがって里親会費は里子への支援と同時に、里子のいる地域の生活改善のために使われる。しかし、初期のころの活動は里子支援に集中する傾向があった。これは当時は円が今ほど強くなく、資金的に里子支援だけで精いっぱいであったことと、理論的には里子から地域にと考えながらも人手不足もあって、地域全体にまで目がゆき届かなかったことによる。

やがて里子の支援だけでは充分でないことに気づくようになった。里子に選ばれた子とそうでない子が生まれることで、地域に不協和音が生じてきたのだ。里子となった子供の家庭が特権化していくことも問題であった。地域全体のことを考えなければ里親運動の健全な発展に支障を来たすと思うようになったのである。地域の問題に目が向けられるのと同時に円も力をつけてきたこと、またスタッフを増員できたこともあって、1986年から具体的に地域開発のプログラムも展開できる体制に入った。

現在CCWAのかかわっている地域はフィリピン各地に20カ所、カトリックの修道会、教区（神父さん）、市民グループが中心となり独自に公衆衛生、職業訓練、給食、経済自立プログラムなどの活動を行っている。毎年各地域（センター）から事業計画、予算案をマニラ事務所に出してもらい、検討し、承認する。

また、新しい地域やグループからの資金援助の要請に対しては、貧しいこと、外からの資金を必要としていること（コミュニティがしっかりしている場合は、外部から資金が入ることで自律性をこわすかもしれないので避ける）、信頼できる人がいる、などの点を考慮して選ぶ。そしてスタッフが現地調査を行う。最低でも3回は足を運ぶという。小林さんは「事前調査には特に力を入れて、慎重に行います。今ODAが批判されていますが、失敗したプロジェクトは事前調査がいかげんだったものが多いのです。ODAに対するNGOということで、今NGOは脚光を浴びていますが、調査や自己評価を怠るとODAと同じ過ちをすることになるのではないのでしょうか」と述べている。

このように地域の生活改善などの活動がCCWAプログラムの重要な柱になってきた。里子に対する支援はまず親グループを組織し、その中の委員会で里子を地域から選んでもらうように変ってきている。ただし人数は大きいセンターでも300人という限度を設け、ほんとうに支援を必要としている子供に限るようにしている。現在の里子数は4300人、支援者は1万人を越える（1人の里子に何人もの里親がつくことがあるので）という。約320人の里親会員は10年以上も里親として支援を継続しており、CCWAの運動が根づいていることをうかがわせる。CCWA事務局はあらゆる機会をとらえて里子個人に対して送られるお金が里子個人のみでなく、地域開発のプログラムにも使用されるということを説明し、ほとんどの人に活動の意味は理解されてきているという。



JVCの 今後の方向性について

日本国際ボランティアセンター

これまでの私たちの経験をふまえ、活動を普遍化させるために、そのよりどころとなる「JVCの基本方針」を作成することになりました。その目的は「はじめに」にありますように、会員間の相互理解と、JVCのことを知ってもらうことにあります。

なお、この文章は執行委員会から委嘱された小委員会によって起草され、東京事務所、現場スタッフ、そして会員の意見を聞き、執行委員会および総会の議論を経て作成されます。会員の方々にはぜひ御一読していただき、御意見・御感想をお寄せ下さるようお願いいたします。(JVC執行委員会)

目 次

はじめに	16	Ⅲ：JVCのプロジェクト.....	20
Ⅰ：JVCとは.....	16	1. プロジェクトの計画と実行	
1. JVCの基本的性格		(1) プロジェクトの意味	
2. JVCの発足の契機		(2) プロジェクトの人	
3. JVCの活動の歩み		(3) プロジェクトの資金	
4. JVCの組織		2. プロジェクトに関する意志決定	
5. JVCの活動を支える人たち		3. 新しい価値の創造	
6. JVCの活動資金		4. プロジェクトの停止・終了	
7. JVCの組織的特徴		5. JVCの国内活動	
8. 「ボランティア」団体としてのJVC		Ⅳ：JVCとJVC以外のグループ、組織、団体、	
9. JVCの今後の組織的課題		機関等との関係	22
Ⅱ：JVCの基本的姿勢	19	1. 活動の対象となる地域の人たち	
1. JVCのめざすもの		2. 活動対象地域のNGOs	
(1) 地球環境の保全		3. 活動対象国の政府や地方自治体	
(2) 北と南の問題		4. 日本の市民、善意ある個人	
(3) 人権の尊重		5. 日本の市民グループ(CBO)、団体、組織、	
(4) 自立的開発		組合、企業	
(5) 異なる文化の尊重		6. 海外で活躍する日本のNGO	
(6) 資本と技術		7. 日本の地方自治体	
(7) 開発協力		8. 日本の政府	
2. 政府開発援助(ODA)に対する建設的批判と		9. 国際的な外国のNGO	
提言		10. 国連の各種機関	
3. 新しい価値の創造		Ⅴ：新しい活動課題：開発教育	23

はじめに

日本国際ボランティア・センター(JVC)は、民間非営利組織(NGOs = NON-GOVERNMENT ORGANIZATION)の一つとして、1980年にバンコクで発足した。これまで、第三世界で発生した難民の緊急救援と恵まれない住民の自立への援助を続けてきた。

この文章で、やがて10歳を迎えようとしているJVCの今後の基本的方向を明らかにしたい。振り返って考えてみると、JVCは資金的にも不安定、組織的にも未熟で、「走りながら考え」、つまり試行錯誤しながら活動を続けてきた。しかし、これまでの経験を踏まえ、今後少なくとも数年間は拠りどころにしようする中期的展望をもち、基本的な活動の方向性をはっきりさせることが必要である。

この文章は、JVCの会員の相互理解を目標にしたものであるが、これからJVCに参加しようとする人々、——ひいては国際協力の問題に関心をもっているより多くの人々——に、JVCの基本的姿勢を明らかにする意図も含まれている。JVCでは、いままでの種の文章を作成したことがない。それは「JVCは自発的意志の集合体である」という考え方を重視し、参加者の主体的な考えと、討論によって共通点を見つけてきたため、このような文章を作る必要性を感じなかったからである。いまでも、この「参加する人々の意志と選択によって、JVCそのものを作りあげる」という原則には変わらないが、経験によって得た基本的考え方を、あきらかにするため、文章にすることにした。

JVCはすでに「規約」があるが、この「基本的方向」では少しそれを具体的にし、JVCの「考え方」、取り組みの「姿勢」を明らかにしたい。

この文章は、あくまでJVCの現時点での方向を示すものであって、永遠不変なものではない。世界の状況は刻一刻と変化、国内の政治・社会状況や地域人々の考え方も常に変化している。その意味で、この文章はいわば暫定的なものであり、将来改めて検討しなければならないことは言うまでもない。

I JVCとは

1. JVCの基本的性格

JVCは非政府・非営利団体(NGOs)の一つである。われわれは地球上のすべての人々が基本的に自立しうること信じる。また、皮膚の色や宗教的信条、あるいは単純な政治的イデオロギー、男女の別などによって人間を差別しない。JVCは、市民の自覚にもとづく自立的な組織であり、日本政府の外交政策や国際戦略、または国益に貢献することを目的にしたものではない。日本人を含め世界中の人々が、抑圧したり抑圧されたりすることなく、われわれの生活基盤である地球を傷つけずに永続的に暮らしていける社会を実現することが、われわれの希望である。

2. JVC発足の契機

JVCは1979年暮れのインドシナ難民のタイ流入をきっかけに、日本から駆けつけた人たちと、現地ですでに行動を起こしていた人たちとで、1980年2月27日、バンコクで設立された。

3. JVC活動の歩み

この10年近くの歩みのなかで、「緊急救援」から「復興協力」へ、そしてさらに「開発協力」へと、活動内容が変化してきた。それと同時に、活動地もアジアだけではなくアフリカにも広がり、現在、6カ国で活動している。

JVCは、1980年、タイに流出したインドシナ難民への救援活動から始まった。みずから飛行機切符を買い、国境に駆けつけた日本の若者と、その当時タイ国に滞在していた

日本人主婦を中心に、まず、食料援助や水の確保などの緊急援助(EMERGENCY RELIEF)を行った。その後、難民が徐々に危機的状況を脱するにつれ、難民キャンプや難民村での補助給食、公衆衛生、語学教育、技術訓練などの復興協力(REHABILITATION)へと活動の重点を移していった。また、設立当初から、難民救援と平行して、スラム改善、子供図書館建設などの開発協力(DEVELOPMENT)活動を行ってきた。現在ではこれが発展し、農村開発、環境保全などの開発問題全般に活動が広がっている。

1983年4月に、JVCは本部をバンコクから東京に移し、翌年1983年8月には、名称を「JAPANESE VOLUNTEER CENTER=日本奉仕センター(JVC)から「JAPAN INTERNATIONAL VOLUNTEER CENTER=日本国際ボランティアセンター(JVC)」に変えるとともに、組織的充実をはかってきた。

1983年には、アフリカ、ソマリアにおいて、エチオピアから流入した難民の自立・定着を目的とした農場建設プロジェクトを開始した。さらに1985年には、極度の干ばつによる飢餓に直面していたエチオピアで、医療を中心とする緊急救援を行った。エチオピアでは、翌年その食料危機を脱してからは、村の生態系の回復と農村の復興のため、植林、農業、生活改善指導などの総合的開発協力を開始し、現在に至っている。

一方、アジアにおいては、1986年、難民流出国の一つであるカンブチアの日本の民間団体として初めて入ることが

できた。首都プノンペンにおいて自動車修理を中心とする技術教育プロジェクトをきっかけに、その後母子保健、給水などへと事業を拡大して、本格的な復興協力（REHABILITATION）を行って来ている。また、もう一つの流出国、ラオスにおいても、1987年から生活指導員養成センターの建設とその運営を開始した。

また、これらの海外における活動のほかに、日本に定住した難民を対象として、家庭訪問、日本語教育などの国内活動を1983年から開始。その一方、海外の実態や活動の経験を機関誌、報告会、学習会などを通して積極的に広報してきた。最近は開発教育も行っている。

4. JVCの組織

JVCは会員制をとっており、会員は正会員（一般会員、活動者会員、学生会員）、賛助会員、名誉会員によって構成される。JVCの組織は、大別すると、(1) 海外現地事務所および現場、(2) 事務局（本部＝東京事務所）、(3) 執行委員会、(4) 会員総会、の四つの機関から成りたっている。

(1) 海外の現地事務所（海外の首都にあるJVCのその国における事務局）、および現場（海外における難民キャンプ、農村開発の農村、飢餓の村々など）

海外の現地事務所および現場は、JVCの活動の最先端であり、そのプロジェクトを実行について十分な権限をもっている。現場は、状況を的確に把握し、問題解決のための多面的な提案をしてゆかねばならない。しかし同時に、大切なことは、活動対象となる人たちに人間的共感を持ちつつ、同情に溺れず、広い視野と長期的な展望を保つことである。

ときに、現場の日本人スタッフとその国のJVCスタッフとが、雇用者と被雇用者という関係に陥る危険性がある。この問題の解決は難しいが、活動は彼ら自身のものであることを説得して、これを乗り越えねばならない。

(2) 事務局（本部＝東京事務所）

事務局は、総会および、執行委員会の決定や助言を受けながら、具体的プロジェクトの企画・立案、海外の現地事務所との調整、プロジェクト実行のための人材や資金の確保をする。さらにプロジェクトの結果をより多くの人に、より深く知ってもらう広報活動をするなど、多面的な役割を担っている。

(3) 執行委員会

執行委員会はJVCの代表が招集し、原則として年四回開かれる。総会に代わって、重要な事項を審議し、決定

する。また、執行委員はプロジェクトの遂行などについて、多面的な助言をするよう期待されている。

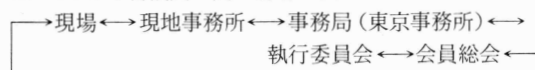
(4) 会員総会

会員はJVC活動の内容につき、積極的な提言を期待されている。

会員総会は毎年一回、正会員の4分の1以上の出席をもって開かれる。総会はJVCの前年度の事業および収支決算の報告を受けて、これを討議ののち承認するとともに、新年度の事業計画と予算案について審議し、JVCの代表および執行委員を選出する。

また、JVCの規約の変更は総会の承認を必要とする。

(5) JVCの各機関の間の意志の流れ



5. JVCの活動を支える人たち

JVCは、国籍を問わない数多くの人々によって支えられている。また、活動に参加を希望するものは、誰でも会員になり、参加できる。さらに海外の現場における活動を希望するものは、その意欲や考え方を重点に面接などによって選考され、派遣される。東京での事務局スタッフは、原則として現場経験者があっている。

6. JVCの活動資金

JVCプロジェクトの実施、および組織の維持は、以下の表に述べる寄付金や催し物、カレンダー販売などの事業収益、その他によっている。

(1) 直接的資金

- ・会費
- ・個人（市民）および各種団体からの寄付金および物品寄付
- ・民間企業体などからの寄付金および物品寄付

(2) 間接的資金

- ・国連機関からの委託金（WFP, UNHCR, UNBRO など）
- ・海外のNGOからの寄付金（BAND AID など）
- ・外国政府からの寄託金
- ・日本政府の補助金

(3) その他

- ・JVCが主催する催し物入場料
- ・機関誌購読料
- ・カレンダー、手工芸品、書籍等の売上げ
- ・その他、各種イベント事業からの収入

（グリーンワークなど）

JVCの活動の各年度における基本的財源と事業費

プロジェクト費	1985	1986	1987
(1) 市民からの寄付	3.9%	9.3%	7.8%
(2) 団体からの寄付	56.7%	33.4%	54.7%
(3) 国連等の委託費	36.9%	54.1%	34.6%
(4) 会員からの会費収入	1.1%	1.6%	2.0%
(5) その他	1.4%	1.6%	0.9%
年間総事業費（×1,000）円	417,937	276,622	332,688

JVCの活動の各年度における基本的財源と事業費は、左表の通りである。

7. JVCの組織的特徴

JVC組織の最大の特徴は、「参加するものの自発的意志の集合」によって成立していることである。「難民と、それと同様に恵まれない境遇にある人々に対する援助を行い、彼らの基本的人権の保障、および彼らの自立に貢献する（文章一部省略）」と規約にもうたわれているとおり、「困っている第三世界の人々を助け、友だちになって、彼らとともに新しい価値を模索したい」人々の集まりである。

逆にいえば、「規約」そのものも決して固定的なものではなく、活動する人たちが、JVCを常に革新し、作り上げて行くことができる柔軟さが、JVCの組織的特徴なのである。したがって、この組織をラッキョウ、または星雲にたとえることもできる。「参加するものの意志の集合」であるから、この意志を一つ一つ剥いで行くと何一つ、お金も規約も残らない。つまり意志によって、すべてが生み出されている。それゆえ、個々人の意志を最大限尊重せねばならない。星雲の一つ一つの星はそれぞれ独自の運動をしながら、互いに付くでもなく離れるでもなく、全体としては、ダイナミックな運動をしている。そんな組織がJVCなのである。

8. 「ボランティア」団体としてのJVC

「日本国際ボランティアセンター」という名称の通り、JVCは基本的にはボランティア団体である。したがって趣旨に賛同し、自発的意志をもって参加しようとする人はあらゆる意味で歓迎される。ところで、活動に参加している人たちには、「有給の人（スタッフ）」と「無給の人（ボランティア）」がいる。JVCは当初、インドシナ難民のために役立ちたいと思って国境にかけつけた人々の集団であったから、すべてが無給だった。しかし活動を長く継続するものも、カスミを食べて暮らすわけにはいかない。国内からの寄付の内、約20%を運営管理費という形でいただき、それをもとに給与（生活補給費）を支給することになった。このようにして今では、海外の現場においても日本国内においても、「有給の人（スタッフ）」が増えたが、それぞれ

の国において最低限の生活費が支給されるだけであり、今でもボランティアの性格（無料奉仕の性格）を十分に持っている。

しかし、JVCをボランティア団体であるからといって、これを「無料奉仕」的団体であるとのみ規定することは間違っている。ボランティアという言葉の中には、自分をないがしろにしても、「他人に尽くす」、「他人に奉仕する」「無料奉仕する」というニュアンスがある。これはJVCの性格を正しく伝えるものではない。ときどき、「ボランティアセンターと名乗っているのだから、空いている時間に他人に奉仕することを斡旋してくれる団体」と勘違いされる人がいるが、JVCは決して「自己満足のための団体」ではない。

もとより、善意は大切な「行動の始め」である。そして自分の身の回りのできることから始めていくということは、大切なことである。しかし、JVCはボランティアという言葉で、「無料奉仕する」という意味より、「自発的意志をもって責任ある行動を取る」という積極的な意味で、その団体名として使っているのである。

9. JVCの今後の組織的課題

JVCは、1980年の組織発足以来、9年を経過、この間の国際状況や日本社会は大きく変化した。これに対応して、JVCの努力の方向も変化していく必要がある。

これまでJVCは、日本の良心的な市民、団体、組織などの支援を受けて、エチオピアやカンブチアなどの人たちへの、救援や協力を行ってきた。その一方で、国連などの要請をうけて難民などの救援、援助にもあたってきた。後者を実行してゆくには、国際協力に関する専門的知識や能力が必要とされるため、JVCは専門の職能集団化してゆく傾向を持たざるをえない。しかし、専門職能化することは、一般市民との接点を失う危険性を含んでいる。国外において、対象とする地域の人々と連携するように、国内においても地域の人々やグループと連携できるよう、最大限「多面的にして柔軟な組織」であることに心掛けねばならない。

JVCの活動年表（1980～1989） [略]

II JVCの基本的姿勢

1. JVCのめざすもの

過去10年にわたる活動経験から、次のような基本的姿勢を保つことが大切であると考えている。

(1) 地球環境の保全

JVCは、われわれが地球市民であると自覚することから出発している。現代社会は、国家を単位として競争が行われ、地球資源と第三世界という、国際的に弱い部分を傷めつけている。地球という資源は、汲めど尽きぬ大海ではなく、細心な注意を払って利用しなければならない、貴重な資源である。また、第三世界の人々こそわれわれの仲間である。たとえ物理的には遠く、毎日の生活では共感できないとしても、「もの」の移動を通してたがいに深く結びついている。彼らを傷めつけることは、結局われわれを傷めつけることである。したがって、JVCは国という利害の枠組を乗り越え、地球市民として、あらゆる地域の人たちと、連帯をはかってゆくことを目的としている。

(2) 北と南の問題

先進国内部での矛盾、たとえば資本家と労働者、あるいは都市居住者と農民との矛盾は現在も無くなってしまったわけではない。それどころか、先進国と開発途上国、さらには途上国内部の都市と農村との矛盾に、深刻化して置き換えられている。したがって、当面する問題の解決には、国の枠を越え、対象国の都市と農村の対立をも乗り越える、地域の人々との連帯が何よりも必要である。

(3) 人権の尊重

JVCは、第三世界における難民、飢餓民、被災民など、生命の危機に陥った人々や生活が困難な人々に、連帯の手を差し伸べてきた。人為的原因か自然的原因であるかを問わず、人間としての尊厳、基本的権利、そして基本的な生活が確立されるように助力する。したがって、「緊急」性と、その緊急性を脱してからの「復興」、さらにより安定した生活を確立するために「開発」へと、継続的な助力を行う。

(4) 自立的な開発

JVCは、「もの」中心ではなく、「人間」中心の開発の可能性を信じている。開発の主人公は、それぞれの国や地域社会に住んでいる人々自身であり、その意味で「住民の、住民のための、住民による開発」こそ真の開発である。われわれは基本的に人間の潜在的な力を信じている。協力する地域社会の住民が、個人として、また集団として、自らの潜在的力に目覚め、彼らを苦しめている社会経済的要因を、彼ら自身の努力で克服することを願っている。しかし、ときとして第三世界の地域においては、住民自身の努力だけでは克服できない障害がある。開発協力におけるJVCの役割は、その障害除去に助力することである。

(5) 異なる文化の尊重

地球上のいろいろな民族や集団は、その地の自然環境を通して、異なる文化と価値体系を作ってきた。したがって、進んでいる国、遅れている国などという、単一的尺度によ

って、その優劣を判断することはできない。異なる文化を持つ人々と接するときは、彼らの文化を尊重し、こちら側の尺度で相手を推しはかてはならない。なぜそのような考え行動するのかを、同じ地平に立って理解し、その環境のなかで生活を改善してゆくことが大切である。われわれにはわれわれの、彼らには彼らの、克服しなければならない数多くの問題を抱えているが、そのような現場での共同作業を通してのみ、問題を解決する契機をつかむことができる。

(6) 資本と技術

現在、先進工業国の都市を中心とする商品社会が、途上国の農村の隅々にまで浸透しようとしている。ともすれば、われわれも無意識の内に、先進国の「もの」と「技術」とを途上国に持ち運び、その地の人々をこの商品社会というシステムに巻き込もうとしがちである。しかし、JVCは、外部からの「資本」と「技術」を現場に持ち込まないことを原則にしたい。

基本的には、われわれが利用する「技術」はその地で生み出さねばならない。また提供される「お金」や「もの」も回転資金として必要とされているものだけであって、一方的な依存関係、あるいは依存体質を作り出すものであってはならない。

(7) 開発教育

活動の現場において、第三世界の困難な状況にある人々と、日常生活をともにしたJVCのメンバーは、その体験を自分の個人的経験に留めておいてはならない。運動を支える多くの日本の市民に伝え、同じ地球上で住んでいる実感を分かち合うこと、すなわち「開発教育」を機会をとらえて、実践するよう努力する。

2. 政府開発援助 (ODA) に対する建設的批判と提言

経済援助と技術援助を中心とする政府開発援助 (ODA) は、第三世界諸国の人々に真に役立つよう利用すべきであって、第三世界の富みを先進工業諸国側に移転させる手段になってはならない。そのようなことを実行すれば、その地域社会を崩壊させ、最終的に地球資源を枯渇させる原因になるからである。

1989年度のODA一般会計予算額は、約7,500億円を超え、同じ年のJVCの事業予算約2.5億円の実に3,000倍に達する。したがって、たとえJVCを始めとするNGOが効果的な仕事をしたとしても、ODAが正しく使われない限り、NGO活動そのものが自己満足に終わってしまう危険性がある。そこで、われわれはODAの利用につき、しっかりとした調査にもとづく、建設的批判と改善提案をしていかねばならない。

3. 新しい価値の創造

JVCを含めて、NGOの活動に対する誤解のひとつに、「彼らは、かわいそうな途上国の人々を助けてあげている

善意の集団だ」というのがある。たしかに NGO の活動を推進している人は、心やさしい人が多いことも事実である。その意味ではこの指摘は正しい。

しかし、NGO の活動は単なる善意の活動ではない。この地球に生きながら、地球を無視しようとする日本があぶないと自覚して、日本自身のために行動しているということもできる。だから、自分を捨ててしまって、他人のために尽くす慈善運動ではない。

JVC は国家拡張主義の現代にあって、上に述べてきた、「地球的な環境の保全」、「人権の尊重」、「地域における自然環境と文化の尊重」、「地域的環境にそくした技術の工夫」などの原則を生かしつつ、「国家という枠を越えた連帯」、「新しい関係の在り方」、「生活の仕方」、「価値の体系」を実践的に模索し、これを日本の数多くの市民と共有することを目指している集団である。

Ⅲ JVC のプロジェクト

1. プロジェクトの計画と実行

プロジェクトを計画し、実行してゆくには、常に次の三つの条件について検討する必要がある。それは：

- (1)「意味」：そのプロジェクトが、前記Ⅱ章－1の「JVC のめざすもの」で論じた七つの目標に照らして、どのような可能性を持つのか。
- (2)「人」：そのプロジェクトを実行に必要な「人材」の確保が可能か、そしてその人たちの意志と考え方はどうか。
- (3)「資金」：そのプロジェクトを実行する「資金」は確保できるか。

の三つである。

プロジェクトを実行するか否かは、この三つによって決定される。国際的状況、日本国内の支援、人材の集まりや資金確保の可能性などのバランスをみるわけである。たとえば「意味」が不十分でも、「資金」を重視して実行され

る場合もあれば、資金確保の難しさはあるが「意味」の大切さから、資金的困難を覚悟して取り組む場合もある。それゆえ、プロジェクトを実行、継続の決定は、この指標に関する情報の集め方によって決まってくる。

(1) プロジェクトの意味

まず、プロジェクトの意味について考えてみる。JVC の組織ができたのは難民救援の国境線上であったので、これまで徹底して現場からの提案を重視してきた。現場でいかに手助けを必要としているかが、プロジェクトを実行するか否かの決定的な鍵であった。これは今でも変わりはない。しかし今日では、この「意味」の判定について、もう一つの要素が加わっている。それはその活動を通して、日本の人たちが今日の国際的な矛盾に気づき、われわれの生活を問い直す契機になりうるかどうかである。つまり日本の人たちに、単なる同情以上のものを、どれだけ問い掛けることができるか。これが、プロジェクト実行の是非を決める、もう一つの条件である。

種類	対象の人々の状態	プロジェクトの一般名称
緊急援助	難民・被災民など生存の危機にある人々	医療 水
	緊急事態を脱したが基本的ニーズを欠く人々	食糧、栄養 保健、衛生
復興援助	社会的・経済的自立を目指す人々	農業 植林
開発協力	現行制度のなかで十分な福祉を得られない人々	文化 教育、研修 福祉、救済

(2) プロジェクトの人

JVCには多くの人が参加し、そして多くの人が去っていった。その数は今日までに800人を超えていると思われる。したがって、JVCは参加し去る人のためにある、といっても過言ではない。しかし、JVCの活動は、青春の一時期に行う特殊な行為や活動ではない。いかなる年齢層、いかなる職業の人でも参加できる、普遍的な組織として発展しなければならない。人々がそれぞれの持ち場で工夫し、さらにネットワークをつくることによって、JVCの活動と協力できるような仕組みを豊富にする必要がある。

しかし、ここでは実際に海外のプロジェクト現場で働く「人」ということに焦点を絞って考えてみよう。現場の間は大きく分けると、調整員(CO-ORDINATOR)と専門家(PROFESSIONAL)に分けることができる。調整員は、原則として、あらゆる能力にたけていることが必要である。きびしい未知の土地でも生活できること、英語が話せること、人と協力することなどは、必要不可欠の条件である。ただし、なにかひとつに秀でていれば、なんとか可能性が開かれるかも知れない。

専門家は、たとえば医療、助産、看護、あるいは農業、植林、水、機械、栄養、教育など、広い分野で必要とされている。彼らには何よりも、自分の分野に対する尽きない興味と、それと同時に、その知識と技術とを具体的場で生かして行くための組織的な協調性が必要である。これらの人材を集め、組織的にその経験を蓄積し、より質的に高い人的集団になることを目指している。

(3) プロジェクトの資金

JVCのプロジェクト資金については、I章-6:「JVCの活動資金」の項で論じた通りである。

2. プロジェクトに関する意志決定

先にも記したように、JVCは人々が自由意志で参加する組織であるから、プロジェクトに関する意志決定も、あくまで権限分散の形を取らねばならない。事実、JVCはプロジェクトに関する決定権は、できるだけ現場に近いところが持つことが望ましいと考え、実行してきた。つまり、活動の現場、現場のある国の事務所、東京事務所(事務局)、執行委員会、そして会員総会が指示系統ではあるが、総じて言えば、困難な状況にある現場を支えようと、下位の決定を尊重してきた。これは明らかに一般的な決定権限の順位とは逆である。

ただし、外国だけが現場ではない。たとえば海外の情報を日本の人々に伝え、国際的連帯性の必要について訴えかけ、それに基づき支援資金を得てゆくのは、東京事務所の仕事であり、この意味では東京事務所が現場そのものである。また、友人に募金を募ったりあるいはカレンダーなどを売って資金を得ようとするときは、まさにその場の会員が現場である。

このようなわれわれの考えにもかかわらず、1980年の発足以来、「東京事務所」を中心とした中央の権限が増大している。それは東京事務所が各地における「プロジェクト」

の実行状況、「人」と「資金」の確保など、多面的な情報を得やすい位置にあったからである。したがって今後、決定権の集中を避けるためには、情報をより広く共有してゆくことが、ぜひとも必要である。

3. プロジェクトの評価

JVCが海外で行う救援あるいは開発プロジェクトは、まず第一に対象となる人々による実質的な評価にさらされる。彼らの栄養や健康状態などの物質的条件の改善もさることながら、彼らが自信をもって状況を改善してゆく内の能力がついたかどうか、重要な評価基準になる。

また活動している国の政府からの評価も受ける。これは評価する機関によって、内容が異なる場合が多いが、一般的には物質的な意味を重視し、住民の働く意欲や能力に関する側面を軽視する傾向がある。今後、プロジェクトの質的改善をはかりながら、多面的で柔軟な評価を受けるように努力していかなければならない。

4. プロジェクトの停止・終了

JVCの本来の目的からいって、海外で実施するプロジェクトは、不必要に長く続けるべきではない。状況が改善すれば、巧みに転出、移動することが望ましい。しかし、第三世界の難民や飢餓の問題など、他国からの救援を必要とするような事態は、その国、および国際的な政治・経済・社会的問題と深く関わっているため、簡単には解決することはない。したがってこれまで、タイ・カンブチア国境での活動のように、状況の変化に応じて質を変化させたことはあっても、根本的な停止、終了を迎えた例は少ない。とはいえ、常に状況の変化に応じて、活動が否定的な意味を持たないように、厳しくチェックしていかなければならない。

5. JVCの国内活動

JVCの国内における活動は、原則として国外における活動と同じ重みを持つ。なぜなら、第三世界の窮状は先進工業国との「関係」が改善されないかぎり、根源的に解決することなく、その「関係」の変更には、われわれ先進国側が決定的な鍵を握っているからである。

その意味でJVCは大別して二つの国内活動を展開している。その一つは、国内のインドシナからの定住難民を支援し、日本社会との融合を促進させる活動である。家庭訪問、日本語学習の支援などである。もう一つは、第三世界の人々の様子や、JVCの活動から得た経験を、より多くの人に知ってもらうこと、すなわち「開発教育」活動である。これには、機関誌〔TRIAL AND ERROR〕やニュース・レターの発行、本の出版、帰国した活動メンバーによる報告会、学習会、映画製作、イベント、シンポジウム、物品販売、スタディ・ツアー、海外スタッフの日本招聘などがある。これをより活性化させて行かなければならない。

IV JVCとJVC以外のグループ、機関等団体などとの関係

JVCは一種の「つなぎ屋」である。国と国、地域と地域の人々を結びつけることによって何ものかを生み出そうとする集団である。したがって、JVCは次に掲げる人たちとどのような関係を結んでゆくかは非常に重要な問題であり、これまでの経験上得られた原則的なことを記すると、以下のようなになる。

1. 活動の対象となる国の地域の人たち

第三世界における生活改善は、いうまでもなく彼らのものである。彼らの理性と感情にもとづき、初めて現実化するものである。したがって、基本的にはわれわれの出る幕はない。われわれができることは、生きる勇気を共有すること、すなわち困難な物理的・社会的環境のもとにあって、ときとして絶望に陥りがちな彼らと一緒に、次のようなことをすることである。

- (1) その状況改善について「考える」
- (2) 「技術的工夫をする」
- (3) ときとして、その地における権力の構造の中で、方法を見つけかねる彼らに一種の政治的緩衝地帯を作り出し、「回復の時を稼ぐのに助力する」
- (4) そして、まったくの物質的困窮にあえぐ彼らに、食糧、資源、資材などを提供し、彼らが当面の飢えを凌ぐと同時に、より「永続的な物理的環境条件を構築できるように、工夫し助力する」ことである。

2. 活動対象国のNGOsとCBOs

第三世界諸国に形成されつつある、その国の市民組織＝NGOsや地域の住民組織＝CBOs＝COMMUNITY BASED ORGANIZATIONS)は、まさにその地における状況変革の担い手である。したがって、われわれは自ら手を下さず、できるだけこれらの人々と共同して行く方法を見つけねばならない。国によって、NGOsやCBOsが形成されていない場合は、いっしょに働いて来た人々を励まし、彼らがその地の自立的なNGOsやCBOsになることにできるだけ支援を行う。

3. 活動対象国の政府や地方自治体

相手国政府との関係は、協力と対立の狭間に陥りやすいが、あくまでも政府との協力関係を尊重し、最後まで地域の人々の側に立ちながらも、対立関係を避ける。相手国政府との必要な契約、手続き、ビザの発給申請などの事務は敏速に行い、可能な地域では財団化などを含む法的な登録をはかる。

4. 日本の市民、善意ある個人

JVCの活動を支えているのは、ごく普通の市民、善意ある人々である。JVCの会員数は現在約800人で、資金的には会費合計が活動資金のわずか2%を占めているにすぎない。不定期な寄附や活動内容にたいする活発な意見など、

会員以外からの多面的な支援によってJVCは支えられている。

5. 日本の地域の市民グループ(CBOs)、団体、組合、企業

市民グループやサークル、宗教団体などの団体、報道機関、労働組合、企業など、実に多様な人々、グループからの多額な資金援助によってJVCは支えられている。今後、このような日本の各地域における人々により積極的に働きかけて、われわれの経験を共有し一層の市民的理解を求めための、充実したネットワークの確立を目指す。

6. 海外で活躍する日本のNGOs

JVCは、自らの基本的理念を堅持しつつ、国外と国内の現場において、日本の他のNGOsとできるかぎり協力し連帯する。

7. 日本の地方自治体

地方自治体は県、市町村を問わず、市民にもっとも近い位置にあり、JVCの活動を支え、かつ第三世界の様子を理解しようとする市民との、良き接点となる可能性がある。それゆえ、積極的な協力活動を推進する必要がある。

8. 日本の政府

政府は、日本が今後国際化していかなければならないことをよく理解している。その政策に対し、批判すべき点は積極的に批判し、共同・協力すべき点は最大限協力していく。

9. 国際的な外国のNGOs

海外活動の現場で救援や開発に直接かかわっている、他の先進工業諸国のNGOsとは進んで経験交流を行い、可能なところでは具体的協力関係を作り出す。また、現地において、海外からのNGOsが組織している連絡協議体は、われわれの活動を活性化させるために重要であり、これに積極的参加し、できればその事務局に人を派遣する。

10. 国連の各種機関

JVCはこれまで海外においてUNHCR、UNICEF、WFP、UNBRO、などの国連機関と緊密に連携してきたが、今後ともこれらの国連諸機関との協力関係を促進・増大させてゆく。

V 新しい活動課題：開発教育の推進

JVCは今日まで、いってみれば前に突んのめるように走ってきたが、今後これらの経験を基礎に、日本における「開発教育」の推進に積極的に参加してゆきたい。それは次のような理由からである。

それは、まず第一に、過去9年間を通して、難民救援や貧しい人々のための開発協力を働いてきたJVCの活動者はすでに800人を超えている。彼らは難民や困難な状況にある人々の苦しみを体験的に学んだだけでなく、第三世界において難民を生み出してきた根源的な原因や、貧困を恒久化してきた要因についても考えてきた。その意味でJVCの海外活動経験者は、日本国内における「開発協力」の推進者として、きわめて貴重な人々たちである。

第二に、ちょうどJVCが発足した1980年前後から、第三世界には新しい重要な現象が起こっている。貧困層のために働く、あるいは貧困層の住民自身が参加するNGOが次々に現われてきたのである。この「南のNGO」の出現は、第三世界諸国の自立的な発展という点から、きわめて大きな意味をもっている。また、このような動きは、JVCを含む北側のNGOに、「南のNGO」と共同してプロジェクトを推進する道を開いた。その結果、北側NGOは現場に埋没することなく、精神的、時間的余裕を得、本国での「開発教育」により積極になる条件になったのである。

NGOが海外で行う協力活動は有効である、とわれわれは自負している。少なくとも政府開発援助(ODA)にくらべて、はるかに優れていると信じている。しかし、いか

に有効であっても、JVCの海外協力活動は、現在第三世界が抱えている複雑多様な問題群を解決することはできない。JVCが活動してきた国を始めとして、第三世界は広範かつ相互に関連している多くの問題を抱えている。住民の極貧、食料生産の不振、農村の疲弊、栄養水準の低さや病気、人口の増加、自然破壊の進行、遅れた保健・医療体制、高い乳児死亡率、さらには国民の間での経済的・社会的的不平等など、これらの問題は一義的にはそれぞれの国が解決に努力すべきである。しかし、これらの問題の背景には、日本を含む先進国が深く構造的にからまっている。したがって、経済関係を含む南北間の全般的な関係の改善が必要である。そして、この改善は単に第三世界側にとっただけではなく、物質の豊饒さに溺れ、生活の目標を失いがちな北側の人たちにとっても、十分な利益をもたらすものである。つまり、北側、先進工業国側の人たちにとっても、新しい価値の模索、新しい生活様式(LIFE STYLE)のあり方を模索する重大な契機となるからである。

いま求められていることは、日本を含む北側の人間が第三世界の低開発の問題と、それを生み出し南北の歴史的な関係や構造について正しい認識を持ち、どうすればその解決に貢献できるかについて理解を深めることである。言い換えれば、積極的な「開発教育」の推進である。JVCの役割の一つに、この「開発教育」の推進を新たに位置づけねばならない。

あまり本質的でない 二つの議論

鵜田 三芳

緊急救援と開発協力とは、

どちらが意義深いのか？

JVCは、難民への「緊急救援」を自主的に始めた人々によって、現地タイで設立された。

ところが、緊急状態のおさまった難民キャンプからその周辺にも目を向けると、難民よりも厳しい状況にあるタイの農民がそこにいた。また、農村部から職を求めて首都バンコクに出たものの、まともな職が得られず、大都会の片隅に身を寄せ合う人々も視野に入ってきた。そして、農村部での井戸掘りや診療活動、スラムでの教育活動なども始めた。いわゆる「開発協力」の始動である。

このJVCの展開は決して特殊ではなく、イギリスのOXFAM、アメリカのCAREはその典型であろう。どちらも、緊急救援から始め、徐々に開発協力へと展開したNGOである。

ところで、「緊急救援と開発協力では、どちらが意義深いのか？」という議論をよく耳にする。このテーマは、個人の価値観や世界観にも大きく左右されるため、明確な結論はなかなか導き出せない。ただ大きな流れとして、緊急救援よりも開発協力の方が意義深いと主張する人が多いようだ。その根拠として、「緊急救援は一時的な対症療法であって、その緊急状況を生み出した根本原因を解決するのは極めて難しい。だが開発協力は、社会を根底から変革しえる」と言われる。

しかし、本当に開発協力の方が意義深いのだろうか。この議論に参加してきた私は、この議論そのものに何か無理があるような気がする。あまり本質的に重要ではない議論と最近思えてならない。

そもそも緊急救援は、緊急事態が発生した原因の如何にかかわらず、何はともあれ死に瀕している人々の命を救うことに専念する。まさに人道的な見地から行われる活動である。一方の開発協力は、政治や経済の歪んだ仕組みによって虐げられている人々

に対して、その解放と自立を促すものと私は理解している。したがって、外部の者が主導権を握るのではなく、その渦中にいる人々自身が活動の主役でなくてはならない。

このように考えると、両者を比較する基準や価値観を見出だすのは実に難しいことがわかる。あえて「緊急救援か開発協力か」と問うのであれば、それは単に実施上の選択を問うのみであろう。本質的な意義深さを問うものでは決してないと思う。

「緊急救援から緊急協力へ」(本機関誌のNo. 84)のなかで述べたように、従来の緊急救援がその実施方法において大きな問題をかかえているのは、疑うべくもない事実である。だが、この実施上の問題点を理由に、「開発協力の方が緊急救援よりも本質的に意義深い」と言うのは、この本質を見失った混同としか思えない。

それでもなお問われれば、「どちらも本質的に同等の意義を持つ」と私は答えたい。

海外での活動と国内での活動とは、

どちらが重要か？

日本のNGOも、欧米と比べれば依然として遅れをとっているものの、近年その数が増えており多種多様な活動を展開している。そのなかでも、開発途上国の諸問題や難民問題に係わるNGOが世間に知られるようになって久しい。最近では、日本政府がODA(政府開発援助)をこのようなNGOに拠出することが提案されている。開発途上国の民衆や難民に対して活動するNGOを、その主たる活動場所で大別すると、二つのグループになろう。海外での活動が中心のグループと日本国内で第三世界の問題を人々に訴えていくグループに分けられる。JVCは、その設立の経緯からして、もちろん前者のグループに入る。つねに海外での活動が先行してきた。

ところで、いつごろからか、こんな議論がされ始めた。それは、「海外での活動と国内での活動とは、どちらが重要か」というものである。先にあげたグループの立場から言うと、前者は海外での活動に、後者は日本国内の活動に、その重要性を主張する傾向があるようだ。それぞれの主張の根拠を私なりに代弁すると、前者の場合は、「問題をかかえている人々をまずどうにかしなければ」となり、後者の場合は、「問題を発生させる原因の根源は、途上国や難民発生国というよりも、先進国にあるので」となろう。そして、どちらの根拠も正しいので、こ

の議論はなかなか止むことがない。

ところがこの議論も、「緊急救援か開発協力か」という議論と同様、あまり本質的には重要ではないように思える。なぜなら、開発途上国が抱える諸問題は、私たち先進国が抱えるものとまったく同種同根、表裏一体であるからだ。

例えば、「経済難民」と呼ばれている人々がいる。もともとの定義では、「難民とは、政治や信条などの相違による迫害や、戦争などによって自国を逃れ、自国へもどれず自国の保護を受けられない人々」となっている。しかし、「もっと良い生活がしたい、お金をもうけたい」という理由で国境を不法に越え首尾よく難民になる人々もいる。これらの人々を経済難民と呼ぶのが一般的になりつつある。これらの人々の発想は、まさに先進国の大多数の人々とまったく同じである。さらに経済構造的には、途上国の民衆からその国の政府役人や金持ちが収奪する構造と、途上国から先進国が合法的に収奪する構造とはこれまた同種同形である。つまり、先進国の労働者が権

利を獲得すればするほど、経済活動という現実を通じて、途上国の民衆を抑圧し、経済難民を生むことになるのだ。

経済難民の例だけが、開発途上国の問題と先進国の問題との関連性を示すのではない。日本企業の進出と膨大な投資、途上国からの食品輸入、アジア諸国からの出稼ぎ労働者、途上国の隅々にまで浸透している SONY 神話、タイの田舎でも“リボ”と呼ばれているリボビタン D、先進国では既に発売禁止になった葉や農薬の氾濫、……。枚挙にいとまがないほどだ。もはや、開発途上国が抱える問題と先進国の問題を切り離して考えることはできない。

このような世界情勢のなかで、「海外での活動と国内での活動とでは、どちらが重要か」などとは、基本的には問えないであろう。どちらも重要なのである。そして、できれば、一つの NGO が両側での活動を同時並行的に行うことがもっとも望ましいと私は考えている。

意見・異見・偉見……

●海外の活動か国内の活動かという議論よりも、JVC は国内活動に実際に人材をさいてほしいですね。それから緊急救援と開発協力はつながっているのだから、あえて対立させることもないと思いますけど。

(正木)

●僕は国内と海外とどちらが大切かというより、どちらが楽しいかと考えたい。僕は絶対に海外の方が好みなあ。

(エチオピア 鈴木)

●日本での矛盾を告発して、それで日本の方向を変えることができればいいけど、すぐにそんなことはできない。そういう社会に我々は生きていると思う。今できることは、被害をこうむっている人を力づけて、お互いの力関係を対等に持っていこうとすることだ。

それから我々の求める豊かさとは何なのかということも考えなくてはいけない。世界の矛盾を告発するにしろ、開発をめざすにしろ、求める世界がどんなものなのかを描けなければ同じことのくり返しだ。ラオスの農民も新しく入ってくる物にとらわれている。ほおっておけばどんどん消費物資が入りこみ、よその社会に依存しなければやっていけなくなるだ

ろう。我々も同じ問題を抱えている。そして、彼らも我々も同じ闘いをしているのだ。(ラオス 谷山)

●これまでシャプラニールは開発協力というスタンスでバングラディッシュの人々と接してきましたが、85年のサイクロン、87年の水害などの経験から緊急救援に即応する体制が必要になっていきました。開発協力と緊急救援は生活改善をめざすなかで、それらは切り離せない。トータルなものだと思います。

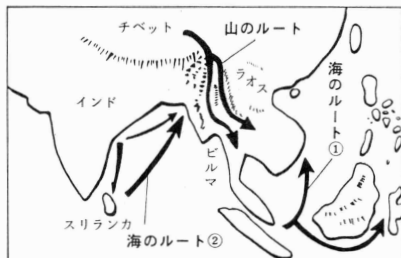
NGO の活動は海外での活動も重要だけれど、国内の生活のあり様を問いかけるものでなければならぬと思います。欧米の NGO も開発教育には力を入れていますし、我々も国内活動は重視しています。もちろんバングラディッシュでの活動があるから日本の問題を考えることもできるわけで、両者は連動しています。どちらが重要かというのではなく、どちらに力点を置くかについては毎年話しあっています。

(シャプラニール 渡辺)

●緊急救援、開発協力、海外での活動、国内の活動、それぞれ違ったアプローチがあると思うから、重要か重要でないか議論することはないが、それぞれ深く考えなければならない。だから議論自体は必要である。それをつきつめていくことによって本質的なものが見えてくると思う。(JVC 神奈川 山口)

かぜをひいたウサギ

今回の民話は文章がやや短いので、インドシナ半島の地理の話から入ることにしましょう。



インドシナ半島の屋体骨、ビルマ、ラオス等の山岳地帯は、インドの北側のチベット高原から延びてきています。大昔、インドシナ半島の民族はこの山脈づたいに海のルートへ（図中①）進んで各地に散らばっていきました。似かよった言葉で民族を区分したとき、一見距離の離れたチベットとビルマが同じまとまりに入るのもそんな理由があるためです。（チベット/ビルマ語族の他、モン/クメール語族やタイ語族などがあります）やがて人間の移動、定着の後には険しい山のルートよりも海を通るルートが重用されるようになりました。仏教（上座部仏教）がインドシナ半島に広まったのもインドからスリランカ、ビルマという経路でした。（図中②）

インドシナ半島からインドネシア、さらに日本までの生活の中にも古い文化的共通性が見直されていますが、これも陸路より海のルートに多くを負うものでしょう。民話を比べてみても機知に富むいたずら者の主人公（多くはウサギ、一部ではシカや人間も）の登場する何種もの話が目立ちます。これらの起源をインド（ジャッカルが登場する同じような話がある）からスリランカ、ビルマの海のルートと結びつける考えがあります。一方、チベット、ビルマにこのウサギの話の多いことで、先に述べた山脈に沿った古いルートにこれな話の起源をさかのぼる考えもあるのです。（村田広平）

王様ライオンが、クマとサルとウサギを、自分の国の大臣にして、皆で一緒に森を見回っていました。

ところがある日、ライオンはこの仲間にあきてしまい、殺して食べてしまおうと思いました。でも、自分で選んでこの動物たちを大臣にしたのですから、それを殺してしまうには、それだけの口実を考え出

さなくてはだめでしょう。

そこでライオンは、三人の大臣を呼びよせて言いました。

「きみたちは、しばらくわしの大臣をしてきたが、そのために墮落したかどうか、これから調べてみる」
こう言ってライオンは、口を大きくあけると、わしの口はどういうにおいがするか言ってみよ、とクマにたずねました。もちろん、ライオンはたいへんな肉食動物ですから、口からはいやなにおいが出てきました。

正直者のクマは言いました。「陛下のお口は、じつにいやなにおいがいたします」

「この裏切り者め、！」とライオンはおこってほえました。

「おまえは王様を目の前で侮辱したのだ。裏切りの罰は死じゃ」

こう言ってライオンはクマにとびかかると彼を殺してしまったのです。

今度はライオンは、サルに聞きました——王様の口はどんなにおいがするか、と。クマがどんな目にあつたかを見ていたサルは、命が助かるには、おべっかをつかうしかないと思ったので、こう言いました。「陛下のお口は、まるで上等の香水のようないにおいがいたします」

「おまえはうそつきのおべっか者だな」こう言ってライオンは怒りました。「だれだって、肉食いのわしの口は、いやなにおいしかしないことを知っている。うそつきのおべっか者が王様の相談役をしていては、国のためにならんわい」

こう叫んでライオンは、サルにとびかかって殺してしまいました。

つぎにライオンはウサギに聞きました。「賢いウサギよ。わしの口はどんなにおいがするか、言ってみよ」

ウサギは答えました。「残念なことに陛下、わたしは今かぜをひいていまして、鼻がばかになっております。家に帰りまして、しばらく休養してかぜを直しましたら、その時は、陛下のお口がどんなにおいをするか、申し上げられるのですが」

こう言われては、ライオンはウサギを家に帰してやるほかはありませんでした。もちろん、ウサギはそれっきり王様の近くには出てきませんでしたとき。（社会思想社「世界のむかし話集・下」より）

JVCNEWS

ラオスに母子研修センターが完成

ラオスの首都ビエンチャンに、生活改善指導員養成のための「友好母子研修センター」が完成した。これは JVC がラオス女性同盟に寄贈したもので、クリーム色の二階建て。50人が研修を受けられる教室、宿舎、保育施設があり、建設費用は約 500 万円。3 月 1 日には開所式が行われ、東京から岩崎代表が出席した。

同センターでは、今年は保健・栄養・育児について普及活動を行う普及員を 4 カ月間で養成し、来年度は農業および適性技術の普及員を 6 カ月で養成する。保健・栄養・育児の改善普及員と農業普及員は互いに協力しながら、出身村＝活動村を中心に 5～6 カ村を常時巡回して、村の生活改善を女性の手で行うように促している。

ラオスでは、このような草の根レベルの生活改善活動は初めての試みである。この村起こし運動によって、アジアの最貧国の一つといわれるラオスの人々が伝統的な貧困から脱し、都市に従属せず、村人としての力を付けていくことが期待されている。



今月の研修生

先月 6 人の研修生をご紹介したが、今月も新たに 2 人の研修生が加わり、東京と神奈川のオフィスを回ったり来たりしている。

小野豪大（おの たけひろ）さんは、4 月から JVC 神奈川のスタッフとなり、定住難民のコーディネーターとして専念することになった。最初の仕事は 4 月 12 日～5 月 10 日のタイ研修旅行である。今後の抱負などを伺ってみると、「こちら（日本）ではパナニコム・キャンプから来た人たちに携わるので、実際に現地に行って、JVC のプロジェクトの一端を知り、パナニコムのスタッフと協力体制が取れるようにしていきたい」。

小野さんは約 1 カ月間で、JVC のバンコク事務所、パナニコム・キャンプ、カオイダン・キャンプ、スラムなどを見て回る予定だ。

久津輪雅（くつわ まさし）さんは筑波大の 3 年生。今年 1 年間休学し、とりあえず 4 月から 2 カ月間、ボランティアとしてパナニコム・キャンプで日本語を教える。

久津輪さんは、昨年総務庁主催の東南アジア青年の船に参加して東南アジアに関心を持った。その後、大学でタイの人の話を聞く機会があり、その時の司会が同大学の助教授でもある岩崎 JVC 代表だった。

「どうしてこういうことに興味を持ったのかといわれると、説明するのは難しい。ただ日本語を教えるだけじゃなく、何でもいから自分も何か受け取ってきたい。頭の中をからにして、1 年間できるだけのことをしてみたい。その後のことは帰ってから考えるつもり」。

4 月からパナニコムで 5 人めの日本語教師となる久津輪

小野豪大さん



久津輪雅さん



さんは、「就職のことはまだ考えていない」というが、就職活動をしている同級生とは違った意味で、自分の道を探しているのだと思った。

チャリティーカレンダー販売に御協力ありがとうございました

カレンダー「アジアから — 朝靄のなかで」の販売による活動資金づくりにご協力ありがとうございました。印刷した 10,000 部のほとんどを売ることができました。ここに会計報告をさせていただきます。

支出

印刷費 10,000部（含ちらし 18,000枚）	3,364,100
紙代	752,648
写真家旅費（カンブチア往復）	160,000
ボランティア経費（75,000 × 3 カ月）	225,000
その他	433,956

合計

4,935,704円

収益金

6,292,420円

収益金の使途

1. ラオスの生活改善指導員養成活動に	1,500,000円
2. カンブチアの技術学校に	1,500,000円
3. タイでの活動全般に	1,500,000円
4. エチオピアに	700,000円
5. 国内の定住難民活動に	500,000円

なお、収益金は以上の 5 つのプロジェクトに使わせていただくことが決定しました。当初はアジアのラオス、タイ、カンブチアのプロジェクトに使わせていただくということでしたが、その 1 部をアジアからアフリカへの連帯の意味をこめてエチオピアに、また、日本国内に定住したインドシナ難民の人々のためのプロジェクトにも使用させていただくことにしました。

残金につきましては、来年度のカレンダー制作の予備費として利用したのち、無指定募金に入れさせていただく予定です。今年もすでにカレンダー制作の準備に入っています。昨年同様よろしくお願いいたします。

チャリティーカレンダー担当 正木幹生
岩崎美佐子

神奈川大学 3 年、金成邦子（かなり くにく）です。この度、JVC NEWS の欄を担当させていただくことになりました。知識も自信もまったくありませんが、勉強のつもりで書かせていただきます。インドシナ難民に興味があります。

JVCプロジェクト

1989年 3月25日 現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2, 3土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 熊岡路矢, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 加藤志保, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。		山口誠史,
日本国内	●定住難民プロジェクト 3月7日に大和定住促進センター職員とボランティア団体との懇談会が開かれた。8つのボランティア団体が参加し, ボランティアや団体から意見や質問, 要望などが出された。討議のなかで互いに連絡が不十分で, ある種の不信感を持ち合っていたことが明らかになり, 今後は連絡を密にとり合いながら協力関係を作りあげていくことが決まった。 ボランティアの人たちが書いた87年, 88年の活動報告書の中から, 作者の了解を得られた文章をまとめて報告書が完成した。それぞれのボランティアの経験や苦労話がつづられて, 活動のよい教科書となるものである。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「国際交流ホスピタリティトラスト」, 日本少林寺拳法連盟, 特別養護老人ホーム「さくら苑」	山口誠史, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●総合的復興促進 (マーシャ) 1. 植林, 土壌保全 昨年10月より今年の植林に備えて50万本の苗木を準備中である。また農業省の協力で植林予定地も近々決まる予定。 豪雨のため, 新たに掘られたみぞへのチェックダムの建設, また破損した既存のチェックダムの修繕も行われている。 2. 母子保健・栄養 種々の訪問形式による指導に加えて母親学校が1月よりアダグイヤで始まった。 3. 建物建設 最貧層の農民を対象とした職業訓練の一環として養鶏を, 農業省の協力を得ながら計画しており, そのための鶏小屋を建設中である。 4. マーシャクリニックへの支援 予防注射のための登録, 輸送等に関する支援を今までどおり続けている。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, 日本少林寺拳法連盟, モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, ジャパン・タイムス, チャリティ・サイクル, Tree for lifeの会, 中部善意銀行	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, 江原浩昭, 江原広美, 南部良一, イエットベルク, ソロモン, パレタ, ダニエル, エシャトー, トーマス, シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	88年12月末から延期になっていたソマリア人スタッフの89年度の人事が行われた。6年目を迎えたJVCルークの活動目標を考慮した決定であり、当初からのスタッフの何人かもJVCを離れることになった。郡政府から一方的に「JVC農場近くに移り住んだJVCの受益者である難民を元にもどせ」との手紙が届き、JVCの活動の障害となっている。 ●農業による自立促進 ポンプ等の故障、盗難により、やる気のある農民とない農民とがはっきりと別れてきた。 マガネイ・キャンプの農場(Unit 1~5)はあい変わらずJVCに頼る傾向であるが、89年度はJVCは手を引き“自分たちの手ですべての問題を解決する”という方針で活動する。 Unit 10~13は少数部族であるアボ族の人たちの農場であり、40世帯の難民と30世帯の地元民との村が形成されつつある。また、診療所、モスク、コーラン・スクールの建設も自分たちで行う予定である。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, シアッド, ムハボ, 磯田厚子, 中野周二, 羽田尚由, モハメッド, アオキ, アブドラーヒ, アブディ ナサル, ヒレ, アブディ カリム, シュクリ
ジャララクシ・キ ャンプ (ヒラン郡)	状況改善のためにラシッドがジャララクシに入り、孤軍奮闘している。 ●農業による自立促進 2度目の作付けが行われているが、単一作物(玉ネギ、メイズ)の栽培に偏っており、輪作、混作の普及が望まれる。 植林が予定よりも遅れている。	R.I. - Japan 創価学会青年平 和会議	ラシッド
カンブチア カンボット県 プノンベン カンダール県	●サンタビエップ技術学校／ワークショップ 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え、現在そのうち5台が稼働中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台、溶接や塗装などの修理を入れると約120台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンブチア人スタッフは現在30名おり、その中には技術学校の第一期卒業生15名が含まれている。第二期の授業は88年11月から1年間の予定で開始され、52名の生徒が学んでいる。 今年度の目標は、生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため、エンジン・車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため、トラック10台分の新品のスベアパーツとパッキン等定期交換部品10台分が必要とされる。 ●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動) プノンベン郡病院で働いていた助産婦・看護婦4人を中心に、3カ月の訓練を受けた若い女性12人を新たに加え、88年3月に活動を開始した。当初は仮小屋で行っていたが、10月にはラインセンターが落成し、それ以来そこを活動の拠点としている。11月には準医師2人がセンターで診療を開始し、89年3月には助産婦1名が新たに参加した。 母親への教育を各村々に浸透させるため、巡回母子保健サービスの活動を88年2月14日から開始した。毎週火曜日に7~8人のチームで村を訪問し、村のヘルス・ワーカーとともに、栄養・予防接種などの保健衛生教育、補助給食の試食をもらっている。 ●井戸掘り 今年最初の井戸掘りは2月22日に着工され、プノンベン市にある中等教育を行う先生の養成所に井戸が完成した。その後、カンダール県内で5本の井戸が掘られた。4月にはコンボン・ソム市で7本、カンボット県で6本、コンボン・スプー県で2本の井戸掘りが予定されている。	創価学会青年平 和会議, モラロ ジーMIRC, 立 正佼成会, 日産 労連, 西本願寺, 善興寺ダナ基 金, 高岡寺族青 年会, 覚法寺, 「チャリティ・ ウォークかなが わ」, 日本少林 寺拳法連盟, 毎 日新聞大阪社会 事業団, 大竹財 団, 東京都社会 福祉協議会, 国 際ソロブチミス ト千代田, 明る い社会づくり運 動神奈川県協議 会, 浄土宗東京 教区青年会, 和 平基金, 国際保 健協力市民の会 (SHARE) 仏 教救援センター, 四日市商業高校, 日蓮宗宗務院, 横浜市「世界ふ れあいキャンペ ーン」, 「お告げ のフランシスコ 姉妹会」, 日本 海事センター, 中部善意銀行,	簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, 釘村千夜子, 古西 勇, [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン, アム・ ディエン, メアス・サマ ット, ゲット・ソーン, カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師 (農業省水利局) セン・ロー

堺市ロータリー
クラブ

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 3月10日、来タイ中の岩崎夫妻を交えてジェネラルミーティングが開かれ、今後の方針が話し合われた。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、熊沢ゆり チャタヴァデ・モンコン
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 現在407人の生徒が一気筒、単車、自動車、電気、溶接の各コースで学んでいる。 3月7日、カオイダンの不法滞在者がバンタット・キャンプへ移動される予定だったが、国境付近における戦闘の激化により移動は延期された。サイト2から5000人がサイト3へ、妊婦500人がカオイダンへ避難した。 3月10日、ILO、UNHCRの訪問があり、帰還のための職業訓練としてJVCのプログラムは大いに期待されている。 3月15日、サケオの日・タイ技術協力学校で教えるJOCVの隊員をプログラムの評価のため招く。現在、機材の貸し出しを交渉中。	UNHCR、 SV(Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、清水俊弘、大石道子
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ●日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化、習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ●他国定住予定者へのプログラム 昨年9月にバナニコムへ移動してきたラオス難民の最後のグループ 名と、カンブチア難民1名が3月20日ようやく日本へ出発した。 日本語学校の生徒数 ベトナム 4人 カンブチア 52人	天理教千葉 R.I.-Japan	鈴木由子、竹村雅義、アナン・ブダミリンバティープ 熊沢ゆり、柿木光寿 北詰秋乃
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト 4月に予定している奨学金児童を対象としたキャンプの準備を行っている。 ●クロントイ図書館 Lock 6, 70ライコミュニティに図書サービスを行っている。 ●スラム生活改善プロジェクト 立ち退きの予定されているスラムで住民の組織化を行っている。	モラロジーMIRC、 We Love Asia、 Tree for life の会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、長谷川勉 チャリティーワーク、JOFIC 電気労連、からし種	ワティット・チャンスリャオン、サムルアイ・ジョン・ヨークラン、リーラ・クンナロン、コメン・スンスマン 今泉 恵、 ガームシン・ロンクン
ラオス （ヴィエンチャン 県 ボーリー・カムサイ 県 カムムアン県）	●生活改善指導員養成プロジェクト 3月1日に、JVCがヴィエンチャンに建てたミタパー友好母子トレーニングセンターの開所式が行われた。今年度は5月からこのセンターで、母子保健、幼児教育の普及員を養成する。来年度は農業改良普及員を養成し、母子保健、幼児教育の普及員と同じ地域を対象に、相互に協力して農村の包括的な生活改善普及活動に当たる。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 横浜インターナショナル・ウィミンズクラブ スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺、聖ヨゼフ老人ホーム、堺市ロータリークラブ	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (3月小計 26,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (3月小計 721,942円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (3月小計 22,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (3月小計 226,850円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (3月小計 126,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (3月小計 725,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (3月小計 10,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (3月小計 8,976円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (3月小計 55,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (3月小計 431,700円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (3月小計 201,352円)

編集後記

▶先日原子力発電の是非をめぐる討論会をテレビで見た。推進派はこれからますます生活を豊かにしていくには電力が必要で、それには原子力が最も確実なものであるということだった。一方反対派は、この浪費社会(それも北側に片寄った)を見直し、新しい生き方を選択することによってエネルギーの消費を抑えれば、危険な原発を作る必要はないというものだった。

エネルギー問題は一方では安全性や技術の問題ではなく、生き方そのものを問うものだと思う。無限大に経済成長を求めていく生き方を変えない限り、原子力発電に行きついてしまうのではないだろうか。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (3月小計 718,107円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年4月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
発行人 星野 昌子
発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519
Telex: 7604025 JVCHQ UC
神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会
会内 ☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

Trial & Error(試行錯誤トライアル・アンド・エラー) 第89号

発行日 平成元年4月20日発行(毎月20日発行)通巻89号

昭和57年9月16日第三郵便物認可

